
プレシャス × プレシャス

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレシヤス × プレシヤス

【Nコード】

N9276H

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

わけあり二人組の弟子と師匠。自由奔放、ロマンとお宝に夢を抱く師弟が織りなす冒険は、いつも予想外！

序章 仮面

プレシヤス × プレシヤス

——危険と欲望の果てに求めるものって、何だと思う？

プロローグ

さほど人通りのない街の中を、フードをかぶった少年があたりを見回しながらうろついている。白いローブに身を包み、外からは見えないが、腰には刃のない柄だけの剣を提げていた。

小柄で、華奢な体つきだ。

「まいったなあ……」

所在なさに眩き、空を見上げる。

すでに太陽は傾きはじめ、彼が自分の師匠を探し始めてから結構な時間が経っていることをありありと示していた。

少年の周りを囲む家はレンガ造りのものが多く、その屋根は一樣に日を浴び続けた石の色だ。たまに、まだ新しいレンガを使った、茶色と呼ぶには少々鮮やか過ぎる色彩のものも見受けられるが、それはほんの一部で、最近建てられたものだと一目で判断することができる。

そんな家々は、少年の居る広場を中心に綺麗な円を描きながら計画的に配置されていて、この街自体がそれほど古くはないことを語っていた。歴史のある街ほど道が入り組んでいたのである。

何層にもなって少年を包囲している住宅街のその周りには、高くそびえた城壁が外部の侵入を拒むようにそびえている。実際のところ、それほど大きな戦いには巻き込まれたことはないのだが。城壁

は厳つい様子を呈しているものの、人の交流は盛んだ。

中流層が多いのと、この都市を治める主が積極的によその商人を引き寄せていることによって、多くの旅人や行商人が訪れているためである。

そして、そのほかにも人々を惹きつけてやまない理由が一つある。その理由によって少年とその師匠はこの街――グラナートに来ているのだ。

「師匠……どこ行つたのかなあ……？」

呟いてみるも、答えが返ってくるはずはなく。

この日の朝、彼とその師匠は宿を出て情報集めに専念していたのだが、いつまでたっても待ち合わせ場所に姿を現さないのだ。ほんの一瞬だけ、なにかの事件にでも巻き込まれたのかと思ったが、すぐにそんな想像をしたことを後悔した。

あの、イリス師匠が、事件に巻き込まれる？ いや、確実に巻き込む方だろう！ 少年はそう断言できるだけの自信と経験を持っていた。師弟なのだから、当然他の人よりもイリスについては詳しい。イリスは、たしかに周りの男たちの目を引くような容姿をしている。それは少年も認めていた。

だけど！

人は外見だけでは分からない、という言葉の重みをこれほどまでに実感するとは、夢にも思っていなかった。流れるような紫の長髪に、どんな服でも着こなせてしまうスタイルで。この人が僕の師匠です、と言えるのがどんなに光栄なことか、考えただけでもワクワクしていた時期があったことは遠い過去に封印されている。

「よりによって、『仮面祭』の前に……はあ」

住民に訊いて、初めて知ったことだ。

仮面祭――元をたどれば、この付近の集落に伝わっていた物語にあやかっただけの出来たものらしい。話を聞いた領主さまの気まぐれだろうよ、といていた。

その後、「ま、楽しいことが増えるのは悪いことじゃないよ」

微笑みながら付け加えていたのが印象に残っている。どうやら、領主は住民たちから好かれているようだった。

そして、祭りの準備のために人々は家にこもっており、少年はイリスの居場所を尋ねられずにいた。

人影の一つでもないかと先程からあちこち調べ回っているのだが、なかなか人に会えないのだ。驚いたことに、浮浪者の一人も見当たらない。それほど、この街は整っているということである。

少年は、視線を空から戻し、広場から放射状に広がる道の一つのため息混じりに歩きだした。正面に、夕日が沈んでいくのが見える。オレンジの花が、目に痛かった。

そして柔らかな太陽の光は少年の顔を覆うと同時に、もう一つの影を作り出していた。

目を細めながら、それが人であることを確認する。逆光で輪郭しか見えないが、少年と同じ小柄な体形をしているようだった。この際、子供でも大人でも構わない。

「おーい、その人！ ちょっと待って」

小走りに近づき、声をかける。

その人はちらりと振り向き歩みを止めた。

肩まで伸びる艶やかな黒髪に、大きな宝石のように輝いている黒い瞳。嫌みなく着こなされた、どこか高級な香りを漂わせている服が、振り向いた勢いで僅かに揺れている。さらりと流れるような深紅のカーディガンが、夕日に負けず映えていた。

透き通るほど白くはないが、ほんのりと張りのある肌をしていた。しなやかに伸びる腕は後ろに組まれ、その愛嬌のある顔を際立たせている。

そして、不思議そうに少年を眺めている眼の奥には、ちらほらと好奇心がうかがえた。

普通なら、ここでしばし見惚れるところだが、少年の反応は違った。

ぴくっ、と反射的に身構えている。

「……なにか用？」

少年の様子を不思議そうに見つめる。いきなり声をかけてきた上に、ファイトイングポーズを取られたのなら、当然の反応である。むしろ、穏やかな部類に入るのではないだろうか。

少年はようやく自分の格好に気づいたようで、そそくさと腕を下げた。綺麗にパーツのそろった顔が、心なしか赤くなっている。

「あ、すいません。いきなり……人探しをしているんですけど、イリスって名前の知りませんか？」

軽く謝ってから、声変わりのしてない声で尋ねる。一度聞いたくらいでは、男か女か分らないだろう。

少女は、あごに手をあて、その可愛らしい顔で「イリス……イリス」と繰り返しつつ言っている。

そして、片手でグーを作り、もう片方の開いた手を打つというお決まりのポーズをとってから、

「ねえ、あなた城に来ない？」

突拍子のないことをいった。

ガンガンと頭を殴り、自分の頬をつねり、少年は逆立ちをして問い直す。

「もう一度言ってもらえますか？」

もはやどちらがおかしいのか分らないような状況で、少女も言葉を変えることはなかった。

「ねえ、あなた城に来ない？」

二人の間に、妙な緊張が走る。

しばしの沈黙の後、少年は逆立ちをやめ、頭を上にして立ちあがった。その際に、フードが頭からずれて、彼の髪が見えた。

「やっぱり！ めちゃめちゃ可愛いじゃん！ そのピンク色の髪といい、その顔といい、今日は収穫が多い！」

あわててフードをかぶりなおす少年を尻目に、少女は一人で盛り上がっている。

「……………」

少年の顔が深紅に染まっているのは、一概に夕日のせいだけではないだろう。街全体を照らす、大きな太陽が

少女の長い髪にかすかな赤みを加えている。

逆立ちなんかするんじゃないかと、少年は激しく後悔をしていた。いやその前に、話しかけるべきではなかった。そう思っている。不意に、頭に手を当てて「僕のバカ！」などと連呼している少年の手を温かい手がかんだ。驚いて（先程から驚きっぱなしだが）少女の顔を見上げると、少年とはうって変わってなんの戸惑いもない無垢な瞳が見えるだけだった。

「その、イリスって人は美人？」

どうにもこの少女の発言には脈絡がない。話題が転々とする。

「まあ……きれいな人だけど――」

性格は最悪、と付け加えようとしてやめた。不用意な言葉がどこをめぐってイリスの耳に入るかわからないからだ。もし知られれば、少年をまたとない惨劇が襲っただろう。

「髪の色は？」

「あわい紫色です。長くて、このくらいまである」

腰に手をやり、表現する。少女とは比べ物にならないくらいの長さだ。

「なら、あたしその人知ってるよ」

ようやくパーツが繋がりはじめた。悪戯っぽい笑みを浮かべて、手招きをしている師匠の姿がちらちらと思ひ起こされる。

少年は少し勢い込んで、訊いた。

「どこにいたんですか？ できれば教えてもらいたいですけど」

「お城」

少女が指差した先では、街を見下ろすように建っている巨大な城の、白い城壁が照らされて長い影をつくっていた。住宅街からは少し離れた、小高い丘の上にあり、壮大で包容感のある雰囲気をもっている。一本しかない、城へと続く道にいくつかの馬車がわだちを刻んでいた。

「あれ……ですか？」

少女の顔と、指の先にある場所を交互に見比べながら少年が確認した。夕日が照って眩しいのか、目を細めて城を眺めている。

「そう——」

意味深に微笑んで、少女は小さくうなずいた。赤い唇が、開かれて。

「今夜は楽しい楽しい仮面祭ですから。こうしてお客様を招待しているのですよ。イリスさんも、あなたも。すでに招かれた人なので。理解していただけたか？」

それは問いではなく、少年の意思でどうにかできるものでもなくて。全身に鳥肌が立つのを感じた。ぞくりとするような、または違う人間を見たような——そんな気がした。

一陣の風が、少年の隣をすり抜けていく。ローブの裾がパタパタと音を立てた。

少しでも長く世界を見ていたいといっていたかのように沈むのを拒んでいた太陽が、光を失っていく。——そして、その姿は完全に見えなくなった。

いつの間にか、少女の顔は人懐っこい表情に戻っていた。少年は、内心緊張を隠しきれないままに歩きはじめる。その背中を少女が追いつき、振りかえった。

「ようこそ——仮面祭へ」

先ほど見せた、冷たく、恐怖さえも感じさせる少女の姿と、目の前にいる少女に瞳ははたして同一のものだったのか。

そんなことを考えながら少年——ロートは浅い闇の中を、進んでいくのだった。

序章 仮面（後書き）

ご拝読、ありがとうございます。いかがでしたでしょうか？
とりあえず一話終了。もしも気が向いたら、感想を書いていただくと作者が転げまわって喜びます。
それでは、引き続きお楽しみください。

旅路

二人の男女が、連れあって歩いている。といっても、別に恋人同士なわけではない。

さほど広くはない道の左右では、うっすらと茂る林が視界をさえぎっており、迷うことはなさそうだった。

女の方は、腰まで届く鮮やかな紫色の髪をしていて、その上誰かが振り返るような美人である。ただ歩いているだけでも、なにか注目を集めるようなオーラがあった。生れついた時から持っているカリスマ性なのだろう。

背はそれほど高いわけではないが、隣にいる小柄な少年よりも顔半分くらいは大きい。名前をイリスという。横にいる少年ロートの師匠である。

ロートはといえば、髪を覆っているフードの下から周りを珍しげに眺めている。彼の旅路での様子はいつもこのような感じである。はじめて見るものばかりで、興味が絶えないといったところだろう。

「ねえ」

唐突に、イリスが言葉を発した。

「なんですか」

「あんた釣りしたことある？」

「釣りですか——記憶にないですね」

とロートが答えた。イリスは視線を道の向こうにやると、

「餌はできる限り魅力的に見せること。それから狙った獲物を逃がさないこと。この二つ以外に何かコツがあると思う？」

「そうですね……」

あごに手を当てて考え込むロートに向かって、イリスは静かに答えを言った。

「網を用意しておくことよ」

彼らの目的地、グラナートまでにはまだ少々の距離があり、通行人の姿もそう多くはない。たまに、馬車に乗った商人が見境なしに声をかけてくるだけである。そういう場合、軽く受け流して歩みを止めることはないのだが、例外もある。

「こんにちは。ちよっとお時間良いですかね。おや、驚いた！これまた大層美しい方で……」

商人特有の愛想笑いを浮かべながら、イリスに話しかける。後ろの半分は、半ば本気の言葉であるのだろう。

ちらり、と。イリスとロートはお互いの目を合わせる。ロートが小さく「やれやれ」と呟いた。

「どんな商品があるのかしら？ 見せていただけます？」

イリスが上品な口調で、興味を持ったようなそぶりを見せる。大げさに喜んで見せて、商人は馬の後ろにある棚のついた屋台に二人を連れていった。

「こちらなどがでしうか？ あなた様にふさわしい、最高級のジュエルでございます」

そういつて、親指ほどもある透明な石を取り出す。イリスはそれを太陽にかざしながら、微笑を浮かべている。実に宝石の似合う女性だ。透き通るような美しさと、神秘的な雰囲気がお互いを惹き合っているのかもしれない。

ロートも、一回り小さいサイズのものを取り出し、しげしげと見つめている。赤い宝石の裏側を覗いたり、コツコツと叩いてみたり。太陽に透かすとくすんだ光が童顔に降り注いだ。

「これ、お値段はいくらかしら？」

「いつもなら、500000円ほどでございますが、その美貌に敬意を表して特別に400000円とさせていただきます！」

「あら、口がうまいのね」

ほほほ、と口元を押さえて小さな笑い声をあげる。ロートは背筋に悪寒が走るのを覚えた。

「そんなことはございません。本当にお綺麗でいらっしゃる」

たしかに、お世辞でなくてもその台詞は通用するだろうな、とロートは思った。そして、標的が自分に変わらないうちにフードを深くかぶりなおす。彼も一応イリスの連れである。いつ話題を振られるかわかったものではなかった。

「そういわれると、悪い気はしないわね」

これは嘘ではない。人間、褒められればうれしくなるものだ。ただ、イリスは舞い上がらないだけの自制心を持ち合わせていた。

「さあ、どうないますか？」

最後のひと押しとばかりに、商人が口調を強めた。気の弱い人なら断りきれない圧力がある。急に目つきが鋭くなり、言葉の裏には武器で脅しているような圧迫感を秘めていた。

だがイリスは特に気にとめた様子もなく、キラキラと光るそれをもてあそんでいた。

「師匠、そろそろ終わりにしませんか。早く行きましょうよ」

少年の手にあった宝石はいつの間になくなっており、空いた両手は頭からかぶったフードの淵を握りしめていた。商人の眼には、ロートの仕草がまるで駄々をこねる子供のように映った。

イリスは諭すように、

「ロート。旅は楽しみなさいって、いつも言っているでしょう。もし忘れたのなら、今一度教えてあげてもいいけど……」

と言って、弟子に顔を近づけた。妙にニコニコしているのが実に怖い。

「わかりました！ いえ、わかってます！ だから、教えてもらわなくていいです！」

ロートが即答する。心からの叫びだった。

「そう……残念ね」

小悪魔のように口元を少しだけ緩めて、ロートに笑顔を向ける。紫の髪が顔にかかったので、手で払った。一つ一つのさりげない動作に、優雅さと気品さがうかがえる。女神に祝福されたとか形容のしようがない、完璧な外見だった。

ロートはこれ以上何も言わなかった。心なしか、顔色が悪い。紫の女神はその整った顔を上げると、弟子のフードをがっしりとつかんだ。

「へ？」

そして、思い切り手を後ろに引いた。見事なまでにピンクな髪があらわになる。

「あわわわっ！ な、何するんですか師匠！」

恨みと焦りの眼差しを送りながら、あわてて髪を隠す。イリスはというと、嬉しそうな視線をロートに送り返していた。いたずら成功。そんな言葉が表情に浮き出ている。

アヤメ色の長髪も珍しいが、ハスのように自然なピンクをした髪はさらに稀だ。目つきの変わった商人はしめたとばかりに、ロートに顔を向けた。嫌な予感が電流のように全身をめぐっていく。

「そちらのお嬢さんも、大層可愛らしくて――」

ロートの耳が、ぴくりと反応する。イリスが笑いをこらえながら見ると彼の表情は引きつっていた。口元がひくひくと動いていて、痙攣を起こしかけている。

「いま、なんと？」

「い、いえ……可愛らしい、御令嬢だと……」

ロートのただならぬ雰囲気は商人が口ごもる。その額には、先程まではなかった冷や汗が流れていた。小さな体躯のいったいどこから氷のように冷たいオーラが湧き出ているというのか。

「御令嬢？ 僕が？」

「僕」という一人称を聞いて、商人が安心したように胸をなでおろす。なんだ、そんなことかと思ったのだ。しかし、ロートの放つまがましい威圧感はなくなっただけではなかった。むしろ切っ先を鋭く砥ぎ、威力を増したほどだ。イリスはロートの様子を見てにやにやしている。

こうなることを予想してフードを取ったのだろう。確信犯だ。再びロートが口を開く。

「面白い冗談ですね。あははは」

乾いた笑い声。中身が何もこもっていない。

少しずつ後ずさり始める商人と、目を輝かせながら傍観しているイリスが好対照だ。

鳥がバサバサと音を立てて飛び去っていった。

「あれ？ 笑わないんですか？ せっかくこんなに面白い話なのに」

「は……ははは……」

ほぼ命令するような、有無を言わせぬロートの言葉に、力のない声を上げる。

それを聞いて、更にロートの目が鋭くなった。

「笑ってんじゃねえよ！」

「いや、あんたが笑わせたんでしょうが」

冷静なイリスの突っ込み。ロートはそれを無視して、商人に詰め寄った。

——じりじりと、追い詰められていく。道端の木に背中がぶつかって、もう逃げられないことを悟ると、商人は大声で怒鳴り散らした。

「野郎ども、やっちまえ！」

「ようやく出てきたか……。さあ、ロート。やっておしまい！」

わらわらと、道のわきにある林からどう見ても用心棒ではない、いかつい顔をした男たちが手に手に斧を持って姿を現した。それを見て、イリスは楽しそうにロートに命令する。

実のところ、ロート達が話していたのは商人などではなく、山賊だった。長年の経験で、ひと目見るなり看破したが、一般人だったら有り金を巻き上げられていただろう。ただ、最近は山賊も賢くなっている、まずは偽物の商品を破格の値段で売り付け、売れなければ武力をもって脅し取るという手法を使っている。

この方法ならば、人を襲う回数も少なくなり、街の騎士団などに目をつけられる可能性が低くなる。その上、罪も詐欺だけで、強盗よりははるかに罪が軽くなるのだ。これを利用しない手はない。

ロートは放っておいて、無視しようとしたのだが、イリスの性格

からして無駄なことは知っていた。だから、仕方なく芝居に付き合っていたのである。途中から、本気でつぶしてしまいたいと思っているが……。

「師匠……手加減しなくてもいいですよ」

鋭い眼光で、敵を睨みつけながらロートが訊く。イリスは、そんなのわかるでしょ、といわんばかりの表情で、手をひらひらと振った。

「動機はともあれ、いいわよ。ただし、あたしは手伝わないから」

「どうしてですか？」

「あんたが戦っている間に、こいつを締めあげて金のありかを吐かせなきゃなんないの。最近ちょっと財布の中身が苦しいし、新しい服も新調したいしね」

「まあ、そういうことなら……僕一人でやりますよ」

この二人の生計は、ほとんど山賊からの強奪で成り立っている。元は盗んだものなんだから、それを奪ったところであんまし変わらないでしょ、というのがイリスの持論だ。良い人に使われてお金の方も幸せでしょう、とも。

それに、山賊退治は地元の住民の助けにもなる。だから、お咎めはない。

「あ、そうだ。ボニタ・ソニオ貸してくれませんか？　その方が早く片付くと思いますけど」

ロートが、腰にある柄だけの剣をまさぐりながらいった。

——ボニタ・ソニオ。イリスの愛用する銃である。接近戦から、超長距離狙撃まで使用者の用途によって万能に変化する。全体が闇夜のような漆黒に染められており、打ち出される弾は銀に輝く。射抜かれたものは、痛みもなく最期の夢を見るのだ。美しい、夢を。

「いいわよ。その代り、ノイテを頂戴」

「あれ、使えますか？」

「脅すのにはそっちの方が迫力ですよ。ソニオ使っても価値がわからない人には無駄だし」

——イニフイント・ノイテ。ロートの愛剣である。普段、刃はなく、使用者の魔力によって形成される。その長さは使用者次第であり、伸縮自在だ。

応用すると槍にも斧にもなる。そして、当然その大きさも自由に決められるのだった。

「それもそうですね。じゃあ」

平和なことにこの世界には銃という概念が存在していない。武器といえば、もっぱら剣と弓、そして己の拳くらいだ。だから見たこともない武器を突き付けられてもなんの恐怖も湧かないし、なにより間が悪くなる。あの気まずい雰囲気と言ったら……。

ロートとイリスは、お互いに自分の武器を投げ合うと、行動を開始した。白昼に舞う刃と銃が交差して——。

旅路（後書き）

こんな美人が近くにいたら——みんなデレデレなんだろうな……。。

煩惱

武器を受け取ると同時に、乾いた音が響いた。

一人、二人と胸を押さえ倒れていく。だが、誰も苦悶の表情をした者はいない。むしろ、安らかに眠りにについているようだ。血さえも流れてはいなかった。

「悠久の眠りに、最期の美しき夢を」

ロートの表情に陰りは無い。いたって平常だ。人を撃つことになったためらいも感じてはいなかった。

「く、くそっ！　いったい何だあれは！」

見慣れぬ武器に、増援の足が止まる。それに追い撃ちをかけるように、ロートの射撃が命中していった。弓矢よりも早く、銀にきらめく弾丸が一瞬だけ姿を現したかと思うと、銃口の先にいた者はすでに命をなくしている。

両脇の道から出ていくものと戸惑っている間にいつしか味方の姿はほとんどなくて。先に飛び出た仲間たちはそのほとんどが地面に倒れていた。指揮官と思しき、いくらか服装の整った男が叫びをあげる。

「って、撤退だ！　逃げるぞ！」

背中を見せて、我先にと逃げ出していく。だがロートの指は止まることなく、機械的に引き金を鳴らし続けた。

「おい！　貴様らどこへ行く！　俺を置いていくつもりか！？」

元、商人が叫ぶが、それに応える人はどこにもいなかった。

「ま、逃げてでもロートが逃しはしないわよ。あの子、ああ見えても容赦ないから。わが弟子ながら、怖いくらいにね」

喉元に黒き刃を突きつけて、イリスがいった。

商人は両手をあげながら、それはあんたのせいだろう、と内心毒づいた。

「そろそろ片付いたみたいだし、あたしも調理にかかりますか……」

ロートの戦いぶりを観戦するのをやめ、汗が滝のように流れている商人の顔に目をやる。恐怖からか、顔が青白かった。

剣で軽く何度か商人の頬を叩いて、イリスが優しく諭すように言う。

「お金のありかは？」

「てめえなんか教えてやるもんか！」

どうせ殺されるなら、と付け加えて商人は反抗する。言葉は勇ましいが、瞳は恐怖に溺れていた。

イリスは刃の長さを変えて短剣にすると、力を入れて喉元に突き付けた。

商人が小さな悲鳴を上げる。

「まったく……度胸ないわねえ」

溜息をついて、再び睨みつける。

もう、そこには温かさのかけらも伴ってはいなかった。

「大体見当はついてんのよ。どうせあの馬車の中かどこかでしょう」
うつむく商人。凶星のようだ。

イリスは軽く笑った。

「あたしはね、山賊ってやつが大っ嫌いな。他人が汗水たらして貯めたものを、強引に奪っていくから。盗るなら、優雅で華麗にやりなさい」

盗みを肯定する発言だ。しかも、やり方の指南までしている。これらの器の小さい悪人など足元に及ばないことがよくわかるだろう。商人も格の違いを感じ取ったのか、あきらめたように力を抜いた。
「そう、美しく。鮮やかに！」

自分に酔っているかのように、イリスは商人から剣を放して歩き始める。見えない観客に向かっての演説だった。

「力ではなく、叡智と技によって！そして狙うのは、はした金ではなく夢と浪漫！」

目をつむり、イメージを膨らませる。目の前に広がるのは、自分の言葉に聞き入る観衆たちだ。みな固唾をのんでイリスの言葉に耳

を傾けている。

「ケチな盗人とは違うのです。あたしたちは隠され、葬られてきた宝を探し出し、わが手中に収める！」

そこで一旦、言葉を切る。反回転して両手を広げた。おお、というざわめきが起きた。

「悲しいことに、世の中には低レベルな盗み人たちがはびこっています。そのせいで、あたしたちは誤解され、差別も受けてきました」
目を大きく開き、叫ぶ。

「今こそ、真の姿を見せつける時です！ わたくし、イリスが世の中に変革をもたらせてみせます！」

拍手喝さいが聞こえる。……と思っているのは本人だけで、実際はこそそと商人が逃げ出しているだけである。腰が砕けてしまいまともに立っていられないので、赤ん坊のようにハイハイで何とか林に身を隠そうとしていた。

熱を帯びた演説が終わり、冷静さを取り戻したイリスは足音——物音の方が正確だろうか——に気付いた。舌打ちをして、今の名言を聞いていなかったことに大きな怒りを覚える。

「ソニオを返してもらってもいいかい」

そう呟いて、柄だけになっているイニフイント・ノイテを構える。無造作に突き出すと、一筋の闇が商人に向かって真っすぐ伸びていった。その様子はまるで、教会の天窓から光が差し込んでいるようだった。

「永久の夜を、あなたに——」

漆黒をまとう刃が音もなく太った体を貫くと、商人はびくりと体を痙攣させてうつぶせに倒れた。厚ぼったい背中から、血がとめどなく流れだしていく。そして、それはゆっくりと、地面に吸い込まれていった。

「やっぱり……ノイテは血が出るのよねえ……」

イリスは流血が嫌いである。だからこそ、命中させても血の出ない銃を使っている。

ボニタ・ソニオの効果として、痛みを伴わないというものがある。同時に、血を流すようなこともない。ただ、ダメージだけは確実に与えるのだ。イリスの腕前からして、急所を外すことはまずないが、もしそうなったとしても、撃たれた者は衝撃を感じるだけということになる。狙撃だと気付くには、さらに時間がかかるだろう。

イリスはため息交じりに空を見上げた。

地上の惨劇など知らないかのように澄みわたっている。大きな雲が、のんびりと風に流されながら、動いていった。大空を渡る船のようだな、とおぼろげに思った。

「呑気なものね……」

まあ、あたしたちも変わらないようなものだけど。

久しぶりに自分が流させた血を見て、なんだか暗い気分になっているようだった。予想はしていたことだがさすがに現実には直面するのは、精神的にきつい。

――罪の重さから逃げているだけなのではないか。何度も悩んだことだ。だが、それにはもう決着をつけてある。自分の手は充分に血塗られている、そう思うことによって。苦しみを減らしているのだと思い込むことによって。

「あら……ロートは？」

気付くと、ロートの姿も見えなくなっている。

大方、逃した敵を徹底的に追いかけて仕留めようとしているのである。イリスは小さく肩をすくめると、主の居なくなった馬車へ、ゆっくり歩み寄っていった。目隠しされた二頭の馬の鼻息は森のように静かだった。

「逃がしはしませんよ……」

自分に言い聞かせるように、ロートが呟いた。

族のほとんどは討伐したのだが、たった一人だけ逃げられてしまった。なれない武器を使っていたために手間取ってしまったせいだ。それでも普通の少年が相手にしたとは信じられないほど一方的な展

開だった。

敵の目視はできている。ただ、追いつけはしないだけだ。

——ならば。

木の上に位置を取り、ソニオを肩に当てる。

銃身が光り輝きながら伸びて、そして細くなった。——狙撃型の姿である。

連射ができず、小回りも利かないため接近戦には向かないが、遠くの敵を狙い撃てるように精度が上がっている。遠距離専用の一撃必中に特化したスタイルだ。

片目を瞑って、的を絞る。照準を合わせつつ、敵の次の行動を予想する。それを怠れば、確実に外れることをロートは知っていた。イリスの動きを見ていれば、そのくらいはおのずと学ぶことができる。——大丈夫だ。敵はこちらが狙っていることを知らない。派手な動きもないだろう。

呼吸を徐々に小さくしていく。

本家であるイリスには遠く及ばないが、それなりの腕前は持っている。敵は、十分に射程圏内だ。

「……………」

無言で引き金を引く。反動が肩に伝わり、のけ反りそうになったがなんとか堪えて標的の様子を確認した。

うつぶせに倒れている姿が見える。見事命中したようだった。

ほっと一息ついて、銃をおろす。ソニオは、普段通りの小銃へと戻っていた。

「さて、と……師匠はどこかな……」

おそらくは財宝を吟味しているころであろう。馬車の中に隠されているというのは、ロートにも大体見当がついていた。ただ、商人の生死だけが気かりだった。師匠は流血が嫌いだから、気絶させて縛っておく程度の穏便な手段で制裁を加えてくれていればいいのだが——。

ソニオを腰に付け、木をするするっと降りていく。

少しばかり歩くと倒れている商人の亡骸が見えた。イリスがやったものだ、瞬時に判断する。

埋めてやろうかとも思ったが、お嬢さん呼ばわりされたのを思い出して、そのまま素通りすることにした。

通り抜けざまに、横眼で表情を見る。驚きと苦痛であふれていた。

「師匠は嫌がるだろうな……」

何より苦痛の嫌いな人だ。少しならず憂鬱になったに違いない。

「ま、いっか」

だが、そんなことをいつまでも気にするような人でもない。きつと今頃は、両手に宝石を持ちながら、どれがいいかと悩んでいることだろう。

ロートは足を速めた。

「——うーん……これとこれかなあ……」

右手には指輪、左手には首飾りを持って、イリスは首をひねる。

どちらも美しく、甲乙つけがたい逸品だった。

ほかのガラクタや二流の品はロートに持たせて後で売りさばくとはいえ、身につけるものは一番を選びたい。所詮、装飾品の類は一期一会。そう悩むこともないとは思うのだが……。

「割り切れないのよねえ……」

女の買物物が長い、というのはこの辺に原因があるのかもしれない。贅沢な悩みである。

小さな足音がして。イリスは振り向きもせずに訊いた。

「当然、仕留めてきたんでしょね？」

「あたりまえです。あのくらい大したことはありませんよ。それより、師匠はまだ決まっていらないんですか？」

よくぞ訊いてくれたとばかりに、勢いよくロートに両手を突きつける。

「どっちがいいと思う？」

実にうれしそうな表情で、イリスが笑みを浮かべた。幸せをかみ

しめている。

ロートは少々困った。どちらも似合うといえば似合う。というよりも、イリスに似合わないものは少ない。美人は得である。

真剣に悩みながら、アクセサリーをつけたイリスの姿を想像する。隣にいるのは売却用の品々を持たされたロート。

ああ……駄目だ。ここは適当に選んでおこう。そう思った時。

「適当に選んだら容赦しないからね」

イリスが見透かしたようにいった。ロートは答えに窮して、

「なら、自分で決めればいいじゃないですか」

「それができれば苦労しないの。だからあんたに決めてもらうんじゃない」

「はあ……」

実に面倒くさいが、ここは仕方ない。

ロートは迷った挙句、首飾りを選んだ。あまり派手ではなく、それでいてどこか高貴さを感じる。イリスは、その選択に大きくうなずいて、着けていた腕輪を外した。

前の山賊退治の時に戦利品として貰っておいたもので、文字のよくな、模様のような彫刻が施されている。イリスによると、古代のお守りなのだそうが、ロートにはさっぱりわからなかった。

「いい、ロート。冒険者には直感というものが必要になる時が多々あるの。それは、いつでもどこでも鍛えられるわ。例えば、夕飯を当てるとき、寝る前にその日見る夢を考えると、二又の道でどちらへ行けばいいかを考えるとき。他には――道に落ちている小銭を見つけるとさね」

「最後のは単にセコイだけのような気がするんですが……」

「とにかく！ 鍛えられた直感は物事を一瞬にして見分ける力を持っているの。それも、無意識化に。もう本能といってもいいかもしれないわね」

「本能、ですか。あてになるものなんですか？」

ロートが首をひねる。

「あんたは理性の方を信じているのだろうけど、直感というのはさつきも言ったとおり意識下で考えられる力のことを指すの。ただ、それを筋道だてて説明できないのは、どこか欠けているパーツがあるから。でも推理で補えれば問題はないわ」

「推理……？ 想像ではなくて？」

ロートが首をひねった。なんだか場違いな言葉のように感じたからだった。

「どうしてですか？」

「だって、推理といったら説明できなければいけないでしょ？ 歴代の名探偵たちはすべて華麗に謎解きをおこなったわ。途中で『なんとなくそう思ったからです』なんていう人はいないもの」

そんな強引な理屈を通すのがイリスである。ロートは頭が痛くなつた。

「つまり——ただ単に推理という言葉を使いたくなかったんですね？」

「そうよ。言葉にしろ、何にしろ、むやみに使用するとその価値が下がるわ。もちろん、安易に美しいと言うことも同様ね」

ロートはイリスの顔をまじまじと見た。

美しいと呼ぶには十分だろうが、レディーと呼ぶにはどうかと思う。中身が伴っていない。

大きなため息をひとつついた。

「なによ、その反抗的な目つきは」

イリスが軽く睨む。ロートは力なく首を横に振った。

「なんでもありませんよ……」

一瞬、そんな光景が思い出されて。

果たして自分の師匠には直感力があるのだろうか、と思った。いや、無いとしか考えられない。そうでなければ、これほどまでに長い時間をかける理由が見つからないのだ。

ロートは、不意に右の拳を突き出した。

「じゃーんけーんー」

「ぼい！」

反射的にイリスが応じた。その手は二本の指を出している。対して、ロートが選んだのはパー。

「あたしの勝ちね、何してもらおうかしら……」

「ちょっと待って下さい！　誰も、負けたらいうことを聞くなんて言ってますよ！」

ロートが必死に制止する。止めなければ、どんな無理難題を突き付けられるものか分らないのだ。

イリスは、不思議そうな顔をして、

「あら……じゃあなんのために？」

師匠の直感力をテストするためですともいえず、ロートは「ただの気紛れですよ、ハハハ」と、笑ってごまかした。

しばらく怪訝そうな表情をつくっていたが、考えるのも無駄だと悟るとイリスは立ち上がった。パンパンと土埃を払って、ロートの選んだ首飾りをつける。

紫の髪に、きめの細かい肌と、美しい顔立ちがその魅力をさらに引き立てている。何をつけても似合う人だと、ロートは思った。

最後に髪を後ろへ流して、イリスは髪と同じアヤメ色の瞳を開けた。

「さ、行くわよ。荷物持って」

ロートは馬車の中からめぼしい品を取り出すと、腰につけてあった小さな袋に入れていった。あっという間に、満杯になる。適当なところで区切りをつけ、イリスに合図した。

イリスは、何もなかったように歩きはじめる。その後を、ロートがフードを直してから追った。

空にただ一つ浮いていた雲も、いつの間にか小さな弟子をつくっていて、凍てついた上空を滑るように流れていった。

煩惱（後書き）

贅沢な悩みですねえ……うらやましい。

街中

愛しきものを救うため

その身を捨てた勇敢なる騎士は

その最期に何を見た

比較的きれいな、それでいて厳つい様子の壁が見えてきた。街が近いせいもあって、行きかう人の数は飛躍的に増えている。旅人や、行商人――それ以外の人も多いようだ。

ロートは、つい疑いの眼差しを向けている自分に気づいた。これではいけないと、首を振る。

観察力が必要だが、余計な先入観は眼を曇らせる。そして、濁った瞳は誤った方向へと導く。

「まったく……さっきのせいで……」

ロートが呟くと、イリスが見透かしたようにいった。

「修行が足りないのよ。まだまだ甘いわね」

「どうしてわかったんですか？」

少し驚いたような声色を含めて、ロートが隣を歩くイリスの顔を見た。ロートの方が身長が低いので、見上げるかたちになる。

イリスはロートの方を見ることもなく歩き続けた。

「さっきから、ジロジロと睨んじゃって――わかりやすいのよね」

「あれ？ 見えるんですか」

ロートは目深にフードをかぶっているのだ。イリスのように上からの視点ではその眼を見ることはできないはずである。覗き込むなら話は別だが、イリスにそんな素振りは見えなかった。

「どこを向いているかが分かれば、大体予想はつくわよ。簡単な話

ね」

いくらフードをしているといっても、視線の方向は判断できる。なるほど、といってロートは軽く手をたたいた。実にさわやかな笑顔だ。

どんなに小さな謎でも、解けるとうれしいものらしい。

イリスはため息をつきながら「あんたって……意外と——」

ぬけてるのよね、と言おうとしてやめた。

無駄な小言はひねくれを増すだけである。イリスには、さりげなく師匠としての才能があるのだ。といっても、ほぼ放任主義ではあるが。

喉元にまで出かけた言葉を飲み込んで、イリスが苦笑する。いつの間にか歳をとったものだ。まだまだ若い内に余裕で入る年齢ではあるが、少年とも呼べるロートに比べるとさすがに老けて感じる。

街に着いたら、なにか美味しい酒を飲もうとイリスは心に決めた。ロートはしばらくイリスの言葉を待っていたが、何も言わないのを見て再び前を向いた。

広い道が、遠くなるにつれて狭まっていく。着実にグラナートへの距離はつまっており、もう何分か歩けば到着できるだろうと思っただ。街の中身を見せまいと遮るかのような城壁はだんだんとその姿を大きくし、城門の横で警備をしている兵士は、蟻のように入っては出ていく人々を半分ほど真剣なまなざしで観察していた。特にチェックなどもなく街の中へ入れそうだ。

グラナート——ほとんど情報がないまま、風の噂だけを頼りにたどり着いたものの、本当にイリス達の求めるものがあるとは限らない。実際、半分以上がただの民話かデマなのだ。その中にひと欠片だけ混ざっている真実を探して、旅を続けている。高いとはいえない確率が、逆にロマンを感じさせるのだと、イリスは言っていた。

「騎士サーデイクの残した宝石——『グラナートの誓い』。耳に入ってきたのはそれだけですもんね」

「ま、そういうこともあるわよ」

そんなわずかな情報でも、動かなければならないのが、ロート達の運命である。

イリスは、周りにいる人々に目をやりながら、髪をなでた。

「それが、あたしたちの仕事で、生き甲斐だもの。好きなことやってるんだから、文句はいわない」

「そうはいっても、無駄足に終わることも少なくないですよ」

「人生の醍醐味というものね」

イリスは、何も持っていない手でたばこを吸う仕草をした。本来吸わないので、単に気取っているだけである。

フツと煙を吐くふりをして、人差し指と中指をズボンにこすりつけた。

ロートは肩をすくめてみせる。それをみて、イリスもやれやれと呟いたのだった。

グラナートには、すぐに着いた。上下に動く城門は一番上に吊られており、行く人を拒む様子はない。むしろ、歓迎しているようだとロートは思った。にぎやかで、いい気分だ。

戦いなどで傷ついた跡もなく、汚れてもいない。防備のため、先端こそ尖っているが年季のなさゆえか、あまり迫力は感じられなかった。その下を、多くの人々が出入りしている。

堀を流れる水の音がさまざまな物音とまじりあって耳に届く。雑音というよりは、街が生きている証のように感じた。

城門の付近によくいる浮浪者たちの姿もなく、この街がいかに平和で、裕福であるかを如実に物語っていた。

周りを囲む城壁の上にも、ちらほらと兵士の姿が見えた。いちおう不審者の警戒をしているのだろうが、まず無理な話だろう。人の出入りが多すぎて、検査をするところではない。そのせいか気が緩みまくっているようだった。大半が会話に花を咲かせている。一部の兵士が集まってイリスを指差していた。大方、とんだ美人がいたものだと驚いているのだろう。

今まで通ってきた道よりも広い木橋を、足に伝わる振動を感じな

がら歩いていく。

足音や話し声が響いてロートの耳へと届いていく。木特有の乾いた音が、気分を高揚させた。

「やっぱり、来たなあって感じになりますね。こう、走り出したくなるような……」

拳を握りしめ、足をじたばたさせる。居ても立ってもいられないというジェスチャーだ。普段冷静なロートとしては、珍しいことである。年相応の無邪気さも兼ね備えているということだ。

イリスも、心なしか浮かれた表情をしている。やはり、新しい出会いというのは人の心を高ぶらせるものらしい。——もつとも、この人はいつだっていたずら心満載なのだが。

「さあて……どんなお宝が待っているのかしら……」

人の目があるため、微笑にとどめているが、もし誰もいなかったら叫びだしていただろう。胸のあたりがうずうずする、あの感覚である。何故か無性に踊りだしたくなる。

……流石にそんなことはしなかったが。

ゆうに馬車20台以上が横に並べられるほどの大きさの、石で造られた門をくぐる。日陰になったとたんに涼しくなって、顔がほてっていたことに気付いた。再びひなたに出る前から、活きのいい声が飛び交っていた。

「見てらっしゃい、見てらっしゃい！ 新鮮な野菜がそろってるよ！ ほら、お客さん！ お安くしますよ！ さあ、いらっしゃい！」

「珍しいもの揃っていますよ。いかがですかー」

大声で客引きを行う者から、やや控えめな骨董品屋に、怪しい占いの店まである。

人に踏みならされて、少し色褪せた石の地面の上に、日よけの屋根を備えている。さほど広さもない店の中に所狭しと並べられた商品は、まるでその持ち主たちを象徴しているようだった。

イリスは興味深そうに景色を眺めながら、近くにあった仮面を売っている店に入った。また面倒くさいことを、と思いながらロート

もその後が続く。

壁に掛けられたおどろおどろしい仮面の数々が、イリス達を睨みつけていた。

イリスは、その視線を無視して店の主人に話しかける。

「何か面白いことある？」

「は？」

唐突な質問に、男が目を丸くする。

薄暗くてよくは見えないが、日焼けした肌に、どこか冷めた表情の人だった。手に取った仮面を見つめながら、多くの人を騙してきたのだろうなど、ロートは思った。

同じように、数知れぬ男を泣かせてきただろう微笑みを浮かべて、イリスはもう一度繰り返し返した。

「面白いことがあるかって聞いてのよ？ そうね……イベントとか、噂とか」

「あ、ああ……」

今度は選択肢を与えられて、主人は少し落ち着いたようだった。

視線を上の方にやり、なにか情報がなかったかと思案するようないぐさをする。

すぐに思い当たったようで、ニヤリと笑った。

「教えてやってもいいんだがねえ——」

そういつて、一番派手な仮面の方に目をやった。値札には、目を疑うような値段が書いてある。おそらく、売る気はさらさらないのだろう。飾りとしての役割の方が大きそうだった。

イリスはロートに目配せをするとうなずいた。

腰につけていた袋の中からいくつか金品を取り出し、男の前に突きつける。

「これでいい？」

主人は、黄色くなった歯を見せて目の前にある指輪と金塊を手にとった。そして、無作法に触りだす。持ちあげ、回し、叩いてみせた。

ものほしげに、まだいくらか残っているロートの袋を見つめるが、イリスに睨まれてうつむく。

「まあ……仕方ないな」

「なにが仕方ないのよ。あたしはただ情報をくれっていつてるの。無料同然の仕事ね。それで稼げるなんて、あんたは世界一の幸せ者よ。それともなに」

イリスは顔をぐっと近づけて、

「これじゃ足りないって言うの？」

美人を間近で見たせいか、主人の顔が一瞬だけ赤くなる。しかしその後、すぐに青くなった。

——イリスの後ろでは、ロートが無表情で剣を構えていた。

一面

古びた木の椅子に腰掛けながら、男が話しだす。

「まあ、大きなイベントといえば、仮面祭だな」

「仮面祭？」

聞いたことのない祭りだ。多分、この街独自の催しなのだろうとイリスは推測した。

男が続けた。

「年に一回行われる祭りでな。とは言ってもまだ2回目なんだけだよ、みんな仮面をかぶって街に繰り出すんだ。広場で踊る奴らもいれば、屋台を冷やかすだけの奴らもいる。何をしろっていう規則はねえから、好き勝手やるだけだぜ？ 城では舞踏会もやるらしいな。なんでも、姫様自ら勧誘しに来るって噂だ」

「お姫様が？ なんてまたそんなことを？」

言わずと知れた高貴な身分である。普通なら街へ下りたりはしないだろう。

疑問に思ったイリスが訊いた。

「舞踏会っていうのは、そんなに重要なものなの？」

一城の姫が、自分で誘いに回るというのだ。よほど大切なことだろうと考えた。

「いいや、そんなもんじゃねえ。至って普通さ」

「なら、どうして？」

「この姫様は、お転婆なことでも有名でなあ。よく街ん中をふらふらしているのを見かけるよ」

主人は、どこか遠い目をしていった。

「綺麗な方だぜえ。あんたほどじゃねえが、綺麗な髪のお持ちでなあ……みんなのあこがれの的さ」

「ふーん」

イリスは、他人の容姿が良いからといって嫉妬するような人では

ないが、興味なさげな反応を示した。ロートは嫌な予感が頭をよぎったのを感じた。

「そのお姫様の名前は？」

「サラ・ハーレット様だ。本当の名前は、結構な長さなんだが、覚えちゃいねえよ」

貴族のように、身分が高い者の名前は総じて長い。それは家名だとか、縁故などのためなのだが、普通は略して使う。公の場で仕方なく正式な名前を使うときなど、読み上げるのも一苦勞である。

自分のものでもない名前をいちいち覚えていろ、という方が無理だろう。要は実用性があればいいのだ。

「つまり、この街を治めているのはハーレット家ということね」

確認というよりも、自分の頭に入れようとしているような口調で、イリスがいった。彼女は、自分に都合が悪いこと以外を忘れたりはしない。もちろん、ロートも記憶力は良い。例え覚えておきたくないことでも、鮮明に思い出せるだけの能力がある。

その点、イリスの脳は明らかにタチが悪かった。

「領主の名前は？」

「サモン様だ。なかなかいい領主さまだぜ、俺たちみたいな貧乏人にも優しくしてくださる」

「サモン・ハーレット……ふーんよかったじゃない、あんた恵まれてるわよ」

イリスはそれだけいうと、男に背を向けた。その背中へ、独り言のような呟きが飛ぶ。

「恵まれている……か。どうなんだろうな？」

「どうって——、なにが？」

体の向きは変えず、顔だけを主人の方へ向ける。紫の髪がはらりと揺れて、半分ほどが肩にかかった。女神のような美しさがすべての挙動に備わっていた。

「恵まれていることと、幸せだということは、似ているようでなかなか違うもんだ。そう思うと、恵まれているってのも一体何なのだ

ろうなっ……」

ロートには、男の言いたいことが理解できるような気がした。霧の中で迷いながらも答えを探すような話。解けるかどうかの保証すらない。だが、確実に真実は存在する。そんな問いだ。

イリスは改めて男に向き直った。

珍しく真剣な顔つきで、しかし口元にはわずかに微笑を携えている。

「相対的に考えると、そうね。あんたはすごく恵まれている。けれど、絶対的な関係でいうとそれはすごく難しい問題。——なぜなら、評価基準は他人と比べることで生まれるから。比較し、区別することで価値を見出す方が簡単だもんね」

どこか諭すような口調だ。後ろにいるロートも硬い表情でイリスの話に聞き入っている。彼は自分の師匠がときどき真面目な哲学を教授してくれるのを知っていたから、その裏にどんな感情が込められているのか、なにを理解してほしいのかもきっちり感じ取っていた。

「というわけで、あたしはこの仮面をいただいていくわ。代金はこの子でお願い」

壁に掛けてあった一枚の仮面を取り、ロートを指さす。呆気にとられている主人をよそに、ロートが驚きの声を上げた。

「ちょっと、僕が代金の代わりですか!？」

ふっと笑って、イリスは店を覆っている青い布をくぐった。あわてて、ロートもその後が続く。

外に出ると、薄暗い店内とはうって変わって、空の光が燦々と降り注いでいた。その眩しさに耐えられず、手をかざしてみた。

少しだけ影ができて、イリスの顔が見える。

「あんたも仮面貰ってくれば？」

不思議そうな顔で見つめ返してくるロートに、イリスは仮面祭だからね、と説明した。

納得した様子でロートは店内に戻る。

主人がいぶかしげに睨みつけるが、ロートは一番無難そうな、飾りの少ないものを選んだ。そして、そのまま目もくれずに店外へ出る。

「選んできた？」

こくり、と頷く。

「そう、じゃあ次行きましょう」

計画もなく歩き出そうとしたイリスを、ロートが止めた。

「どこへ行くつもりですか？」

「どこってつもりはないけど、あんたは行きたいところある？」

「まさか買物でもするつもりですか！」

「あ、ばれちゃった」

可愛く舌を出して、コツンと頭をたたいた。てへっ♪ という効果音が聞こえてきそうである。

「これでも弟子ですからね」

ふてぶてしくロートがいう。

「でもまあ、情報収集にはちょうどいいのよ。わかるでしょ？」

「適度なら僕だって目をつむります。けどこんなことしているから万年金欠になるんですよ。しかも自分ばかり美味しいもの食べちゃって……」

「もしかして、恨みの焦点はそこ？」

ロートの顔を覗き込む。わずかに赤くなった頬と、怨みがましい青い瞳が見えた。

小さい呟きが漏れる。

「ずるいじゃないですか……僕だって育ちざかりなんですよ……」身長が低いのだってきつと——そういって、自分でも恥ずかしくなったのかロートはうつむいた。その頭を乱暴になでる。かぶっていたフードがずれて、ピンクの髪が姿をあらわしたり、消したりした。

「今度御馳走するわよ。期待して待ってなさい」

あまり期待しないでおこうとロートは心に固く誓った。イリスは

ロートの頬をぷにぷにとつついて遊んでいる。満面の笑みはまるで子供がおやつを見つけた時に浮かべるそれのようだった。

日常

しばらく続く店の数々を横目に見ながら、歩いていく。入口付近に陣取っていた店の方が優勢だったのだろう、進むにつれてみすばらしい店が増えてきた。みすばらしいといっても、汚れた様子はなく、ただ単に日よけや看板がないだけだ。地面の上に1枚だけ敷かれている布に、自分で収穫したのであろう野菜や、陶器の類が並べられている。

品物の向こうで座っている者も、どこか小奇麗な雰囲気を漂わせている。この街が兼ね備えている特徴がよく表れているようだ。

「ほんとに治安がいいですね、グラナートって」

ロートがあたりを見回しながらいう。他の都市を数えきれないほど訪れてきたが、ここまで安定している街は初めてだった。

「そうね」

イリスがそっけなく答える。彼女には、もっと気がかりなことがあった。それに頭がいつて、他のことにまで考えが回らないのである。

「――宿」

「は？」

「あーもう、どうしようかしら！　どこか良さそうな宿泊先はないもののなの？」

誰に尋ねたわけでもなく、かといって答えを期待していないわけでもない。そんな叫びが乾いた空気にこだました。腰をかがめて商品を見比べていた老人が数人、何かとイリスに目を向ける。ロートはその視線を敏感に感じ取って目をそらした。

イリスの悩みの種――泊まる場所を探すことである。あまりにも重要なことで、それ以外には目がいかないのだ。ロートは道の向こうに浮かぶ雲を眺めながら、

「宿、ですか？ そんなの後で探せば……」

そこまで言いかけて、自分の愚かさに気づいた。

「なんてことだ！ このままだと野宿じゃないですか！ それだけは避けなければ！」

ああ、自分はそれほどバカだったのだ、といわんばかりの勢いでしゃがみ込む。そしてきつ、とあたりを睨みつけた。泣いている子供が見たら、一瞬で泣きやむだろう。そのくらい、鋭かった。

「師匠！ ぜひと暖かくて、清潔で、ご飯の出る宿を探しましょう。そのためには、このルート。いかなる努力も惜しみません！」

「よくいった！ それでこそわが弟子だ！」

無駄に熱く語り合う二人を、白い眼差しが覆う。その頭上を、カラスが鳴きながら飛んでいった。火照った頬に、風が冷たく感じられる。冷たいのはそれだけではなかったが、そんなことはどうでもよかった。

前の街を出てから、運に恵まれず、道端に眠る日々を続けていた。そのため、見た目からは分からないが、疲れ果てている上に、空腹なのだ。

それに――。

「これでやっと虫刺れからお別れよ。もう足がかゆくって」

苦痛を思い出したのか、イリスが顔をしかめる。

「さ、行くわよ！」

さっそうと駆け出すイリス。その横を、ルートが駆け足で追う。

――こうして、次の目的が決まった。

「……案外早く決まりましたね……」

勢い勇んで探しに出たはいいものの、曲がり角一つ行ったところで見つけてしまった。普通に考えれば万々歳なのだが、このときばかりは何故か悲しかった。

建物の名前は、幻夢荘。個人で経営しているらしく、小さい宿だった。

「うん……」

一度燃やし始めた火は、なかなか消えない。不完全燃焼だ。そんな欲求不満の折に、一人の男が扉を開けて目を丸くした。見覚えのある後ろ姿。

「あ、あんただけには会いたくなかった……」

「ヘイ！ 久しぶりの再会に嬉しい言葉だねえ」

「いや——褒めてないです」

イリスがすさまじい速さで後ずさりを始める。その視線の先には、呑気に笑う男の姿があった。

茶色のコートに身を包み、いかにも旅人といった雰囲気醸し出している。その割に表情は軽そうで、明るかった。俗にいう、優男である。

場違いな挨拶にツツコミを入れたのはロート。彼が珍しくイリスよりも上の立場にあるように見える。

「ジャ、ジャック！ どうしてここに……いや、帰って！ お願いだから！」

どうやら、この男ジャックという名前らしい。これほどまでイリスに避けられる人も珍しいものだ。だが当の本人は全く気にする様子がない。

露骨に嫌がられても、相変わらずの笑顔を振りまいている。……天然とでもいうのだろうか。

「そうかそうか。そんなに俺に会えたことがうれしくて腰が抜けてしまったと」

「絶対に違います」

「ああ、ロート君も久しぶりだねえ。また大きくなったんじゃない？」

「……それは嫌みですか？」

「俺の目が君を見つめているって？ そんなわけないだろう。こんなにも優しい視線じゃないか」

「睨みなんていていません！」

いつの間にかイリスは男の背後に移動し、扉を開けて逃げようとしていた。音が立たないように静かに行動するのを、ロートが見逃すはずもなく。襟首をつかんで言った。

「あれ？ 師匠、どこ行くんですか」

ぎくつ、という効果音が聞こえてきそうなほど怖々振り向いて、
「ちょっと忘れ物を取りに……」

「僕が取りに行きますよ。ですから師匠はぜひともジャックさんのお相手を」

「いやいや、そんなことする必要はないわ。あたしが行くから」
見苦しい譲り合いの精神だ。

「おや？ イリスさん何か忘れものですか？」

「え、いや、まあ……」

「なら俺がとってきますよ。どんなのです？」

台詞は好青年のものだが、中身はかなりねじが外れているのである。

「えーと……えー、そう！ あたしの名前が書いてあるやつ。財布なんだけど、探してきてもらえる？」

「えっ！ 奥さんがいたの！」

「それはワイフ」

「また間違えてしまいました。それではっ！」

白い歯を見せて、颯爽と駆けていくジャック。その後ろ姿を、精神的な疲労を伴ったため息で見送った。二人の顔はほんの数分前とは打って変わってやつれているように見えた。

「ご主人、ここでは疲労に効く何かはありますか？」

かなりやつれた表情でロートが訊く。ジャックという男、侮れない。

先ほどの会話をすべて目の前で見ていた宿の主人だが、申し訳なさそうに微笑むだけで口を開くことはなかった。同情する気持ちはあるのだろう。

「……サービス価格で提供いたしますよ」

人の情けというやつで、半額になった。常に金欠の身としては、嬉しい申し出である。

少しだけショックから立ち直ったようで、イリスが主人から鍵を受け取る。鍵本体は親指ほどの大きさなのだが、それについている部屋の番号を記した木札がやけに大きかった。

203と書かれている。

部屋は1階と2階にそれぞれいくつかあり、イリス達が止まる部屋は2階の真ん中あたりだった。両脇には、それぞれ202、204とある。

経済的な理由や、その他もろもろの事情で部屋は共有して使う。それについては、全く問題はない。

ロートが変な気を起こすことはまずないし、もし万が一に血迷ったとしてもイリスが半殺しにする方が早いだろう。加えて、普段から寝食を共にしているため、別段不便なことはない。

年の近い男女が同じ部屋に泊まるとなると、なかなか詮索の目で見られるものなのだが、幸いなことにロートが大人とみなされることはまずない。

本人はだいぶ気にしている様子だが。

「朝食と夕食付きで、一泊2500円です。外食された場合、その分の料金は差し引きませんのでご了承ください」

通貨の単位は「円」だ。万国共通のお金で、どこへ行っても使える普遍の存在。いくつかの紙幣と、硬貨で構成されている。

2500円といえば、半額であることを考慮しても安い方だろう。当然、2食付なら破格の値段である。ジャックに感謝しなければならぬ。

イリスが、なけなしのお金を財布——ジャックよ哀れ——から取り出して払おうとすると、主人がそれを制した。

「後払いで結構ですよ」

治安の悪い街では、前払いが基本なのだが、少なくともグラナー

トにおいては違うようだ。しかし、イリスはその手に2人分の料金を乗せた。

「わるいけど、いついなくなるか分らないから」

本心であった。いつ何が起るか分らないのが、旅である。料金が払えなかったことも何度か経験している。仕方がないことではあったのだが、（少なくとも）ロートの心は痛んだ。

幻夢荘の主人は良い人である。だからこそ、失礼なことはしたくないのだ。

主人としても損はないので、戸惑いながらも受け取っていた。

「それでは——おくつろぎください」

階下に消えていく主人の後ろ姿を確認してから、部屋に入る。

二人が入っても窮屈さを感じない程度の大きさで、ベッドが一つと、その隣に置いてある机が唯一の家具だ。木の壁にちょこんとあいている窓から陽光が差し込んでおり、それが光源となっていた。ロートが床で寝ることになるのだろう、というのは想像にたやすかった。

机の上には小さなランプが置いてあり、好きに持ち運べるようになっていいる。廊下には明かりがなかったため、夜にはランプを持って移動しなければいけないのかもしれない。

「さ、ロート。休む間もなく外へ行くわよ」

「休む間もなくって、自分でいうことですか？」

「いいから気合を示しなさい」

部屋には何も置いていかないで、主人に会釈してから幻夢荘を出た。きしむ音を立てながら、扉が閉まる。

「さて、どうしましょうか？」

ロートが訊いた。イリスは、少しだけ悩む様子を見せたが、

「最初は情報集めからね。夕食までには帰ってくるのよ」

「いわれなくてもそのつもりです。師匠こそ、ちゃんと戻って下さいよ」

「それじゃ、手分けして行動開始！」

拳をあげて意気込むが、ロートはそれに応じず勝手に歩いていく。イリスはローブ姿に冷ややかな視線を送りながら、真逆の方向へと歩き出した。

調査

んー、と大きく伸びをして、ロートは眼を開いた。

飛び込んできたのは、賑やかな市場。城門付近にあったのはまた違い、生粋の商人達が店を構えている。どうやら組合でもあるらしく、計画性を感じさせる配置になっていた。

八百屋なら八百屋、魚屋なら魚屋といった風に、区画ごとに同業者同士で集まっている。競争が激しくなり、透明性のある商いを奨励するためだ。そのため、あちらこちらで値下げを叫ぶ声が聞こえた。

久しぶりに一人での自由行動だ。厳密に言えばかなり違うのだが、目をつむることにした。

期限は夕食まで。ある程度の情報が集まれば文句をいわれることはないだろう。と、いつつも真面目に仕事しようと思ってしまう自分に、少し嫌気がさした。

とりあえず、仮面祭のことから調べよう。

怪しげな男の話によれば、近々行われるそうだ。そういえば、詳しい日時を聞いていなかったと思いだして、目の前を歩いている主婦とおぼしき女性に声をかけた。

「あのー、ちょっといいですか？」

「あ、はい」

面として向き合うと、だいぶ若く見えた。手にはいくらか膨らんだ袋が提げられている。

「いきなりで申し訳ないんですけど、仮面祭について教えていただけますか？　そういうものがあるとは聞いたのですが、なにぶん今日来たばかりで右も左もわからないものですから」

自然に微笑んで、視線を合わせる。同程度の身長の人久しぶりだな、と思った。

「そういうことなら、喜んで。でも……具体的にどのようなことをいえばいいのか……」

言葉に詰まる。問題が漠然とし過ぎていたのだ。

「えーとですね。例えば日時とか」

女性は、きょんとした顔になった。

「仮面祭は——明日ですよ」

「えっ！」

意外だった。少なくとも、もう少し後のことだと思っていたのだ。それにしても明日とは……。

「あら、ご存知なかったんですか。ほら、もうみんなお祭り気分ですよ」

手を広げて大衆を示すが、平常な日々の様子を知らないロートとしてはあまり参考にならなかった。

「そ、それで明日のいつぐらいに始まるのですか？」

「夕方くらいからですね。日が暮れると仮面をつけて出てきて、お祭りをするんです。だから、仮面さえ持っていたらあなたも参加できますよ」

ひょっとしたら、勘の鋭いイリスは仮面祭に参加するために仮面を購入したのかもしれないな、とうっすら思った。

「城では、舞踏会が開かれるという噂を聞いたのですが、本当ですか？」

大して重要なことではないが、一応手元を集める情報は多い方がいい。どんなに些細なことでも、どこで役に立つかわからないものだ。「本当ですよ。しかも、サラ様自らが誘いに来るって話なんです。聞いたところによると、美人さんをスカウトしに来られるとか何とか……あ、これは噂ですから、真意はわかりませんよ？」

美人をスカウトか——絶対に行きたくないな。美人恐怖症のロートは思った。すべてはイリスの所為である。

「性格とかは見ないんですか……その人」

「はい？」

ほとんど独り言のような願いが口から出た。

「いえ……無視してください」

「そう……ですか」

そこで会話が途切れる。なんとなく気まずい空気が流れて、女性が口を開いた。

「そろそろ、いいですか？」

尋ねることはないか、という確認である。ロートは、最も重要なことを聞き忘れていたのを思い出した。

「――騎士サーディクとグラナートの誓い。それについて教えていただけませんか？」

「グラナートの誓い……あの、伝説の宝石のことですか？」

サーディクが隠したといわれる、特大級のジュエル。

想いの詰まったその石は、一粒の涙のようで。淡い夕陽に沈むような、深い輝きを放つ。その雫が溜まり、グラナートの誓いとなった。

ロートが知っているのは、それだけである。

「この街の名前のもとになったと聞いたことはありますが、詳しいことはわからないんです。すみません」

申し訳なさそうに、下を見つめた。

「そうですか……いえ、大丈夫ですよ。だいぶお時間をとらせてしまつて申し訳ありませんでした。大変参考になりましたよ」

両手を合わせてお辞儀をする。かなりの収穫があった。おそらく、これ以上のことは他で訊いてもわからなかっただろう。

「では、ありがとうございます」

去り行く姿を見送ってから、再び歩きはじめる。陽はまだ高く、ロートの姿をありありと照らしていた。

調査（後書き）

この章は短いですけど……。次からいくらかややこしくなります。

昔話（前書き）

ちよつと時系列が変わります。

昔話

自由と束縛

未来と過去

最期に手にするモノは

むかしむかし。ある所に、小さな国があった。

領地こそ少ないものの、民は幸せに暮らし、領主も賢かったので国は豊かだった。しかし、隣国はそれに嫉妬し、我がものにしようと画策していたのである。

領主は軍隊を補強し、隣国の来襲に備えた。そのためあってか、しばらくは小康状態が続いた。

——だが、平和は侵攻によって打ち崩されたのだ。

両軍は国境付近で戦いを続けていたが、どうしても兵力で勝る隣国相手に、じりじりと押されていった。いくつかの防衛線を棄て、生命線である城さえも危うくなっている状況だった。

そんな折に、領主が自分の子供を逃がそうとしたのは当然の行いだっただろう。闇夜に紛れて亡命しようとした逃避行の途中で敵方にとらわれてしまったのは悪い偶然だったというほかない。

領主は歯ぎしりして悔しがった。

要は人質である。交渉をするにも不利な立場になるし、戦いにしても常に殺されてしまうのではないかという恐怖が付きまとう。

八方塞がりであった。

「克蘭デ様。ここはやはり……」

陣内にて、泣きそうになりながら懇願する男がいる。鎧に身を包み、かなりの身分であることを示す体格の良い馬を引き連れている。

毛並みのよく整っている、利口そうな白馬であった。

「ならぬ！ お主を失ってはわが軍の負けは必至。行かせることは出来ん！」

あご髭を蓄え、険しい眼をしたものが一人。その周りを、近衛兵たちが囲っている。

中心に置かれた机に地図が乗せられている。その上には凸の形をした駒がいくつか並べられており、青の方が圧倒的に少なかった。

「しかし！ 勝つ方法はこれしかないのです！ お願いします、この命をかけてエーデル様を救いに行く許可を！」

男は頭を地面にこすりつけ、そのまま動こうとしない。体が小刻みに震えていた。

「あの作戦は危険すぎる。もし敵に感づかれればわが軍はおしまいだ」

親衛隊隊長、サーディクの提案した作戦はすべての明暗を分ける程のものだった。成功すれば不利な局面を一気に打開できるが、失敗すれば敗北しかない。危険すぎる賭けだ。

「お言葉ですが、克蘭デ様。このままでは負けは見えています。」

勝利をつかみ、民を救うには私が行くしか方法はありません！」

サーディク率いる少数精鋭の兵が闇夜に乗り、敵本陣へ奇襲をかける。そして、捕らわれている姫——エーデルを救いだし、後から来た本隊と合流して追撃する。

はつきりいって、成功する確率は低い。

敵が奇襲で敗走しなければ、反撃にあって全滅するであろう。夜の防備も甘くはないかもしれない。本隊が到着するのが遅ければ、先遣隊がやられる。——どれか一つでもうまくいかなければ、命はないのだ。

「むう……」

サーディクの必死の説得に、克蘭デは髭を撫でながら考え込んだ。

緊張した沈黙が続く中でサーディクは祈り、他の者たちはその口

が開くのを待つ。

「……………わかった」

絞り出すような声で、克蘭デが唸った。苦渋の決断であることが、言葉の端々ににじみ出ている。

「部隊はお主が選抜してくれ。残ったもので、後発隊となろう」

「はあっ！」

サーデイクは深々と頭をさげた。目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

克蘭デの言葉がこれほど嬉しいことはなかった。

ゆるぎない決意とわき上がる感謝の念を胸に、早速準備にかかろうと立ち上がった時、背後から声がかかった。

「サーデイク。この戦が終わったら……エーデルを嫁に貰ってくれ」

「な！ 何をおっしゃいますか！ 姫様を私になど……できません！」

お互いが好意を寄せあっているというのは誰もが知っている事実であった。しかし、身分の違いは想像以上に大きな壁となって恋路に立ちふさがっていた。

世間体や、本人たちの意識——そういったものも、障壁であっただろう。それゆえ、進展がおこることはなかった。周りの人も見ていてもどかしいほどに。

「お主も歯がゆい思いをしていただろう。それと同時に、エーデルも悩んでいたのだ。何度もわしのところへ相談に来たものよ。……ただ、わしは何もしてやれなかった」

最後は、悲しくつぶやいて。拳を握りしめた。身分以外に遮るものは何もなかったというのに。

「反論は許さん、すべては勝ってからだ。わかったな」

そう、勝利が必要なのだ。そう心に誓って。

「わかりました。必ずや、成功させましょう。わが剣にかけて！」
数瞬の間、空を見つめた。

空の色は青からオレンジへと変わり、夜を迎えようとしている。

決戦の時は、刻一刻と近づいていた。

「――ご武運を」

「うむ」

克蘭デが大儀そうにうなずいて。サーディクは指示を出し始めた。

虫の音ひとつ聞こえない森の中で、馬蹄が響き渡る。とはいっても、蹄には防音機能の付いた器具が取り付けられていて、音はそれほど大きくなかった。

百人にも満たない騎馬隊である。

戦地が自国であることを利用し、敵の斥候に見つかることなく本陣付近まで進むことができた。目下にはいくつかのかがり火が焚かれていたものの、目視できる敵の見張りは少ない。

「油断しているのでしょうか」

「……たとえ罠だったとしても、我々は行かなければならない。気づいていないことを祈るばかりだよ」

「隊長――参りましょう」

隊員の一人が、勢い込んでいう。たしかに、頃合いであった。

「では、作戦の確認だ。第一小隊は私とともにエーデル様の救出、第二部隊は敵兵舎への攻撃、第三部隊は兵糧の焼き打ちの後に第二部隊に合流だ。――抜かるなよ」

サーディクは自分を中心に円陣を組んでいる仲間達を見回した。誰も彼も、見知った顔である。そして、屈強であった。

「いくぞ！」

声には出さなかったが、咆哮が響いた。

円を解き、隊列を組みなおしていく。――訓練された精鋭ぞろいなだけあって、かかる時間はわずかだった。

サーディクが先頭に立ち、ちらりと後ろを見やる。不安げな顔は一つもなかった。

「克蘭デ様の御為に！」

白馬を駆り立て、ときの声をあげながら突撃していく。静寂が支配していた空間を、男たちの叫びが木霊した。

柵を打ち破り、雪崩のように襲いかかる。

槍を構える暇さえ与えず、逃げだそうとするその背中を次々に貫いていった。

「敵襲！ 敵襲だっ！」

何とかあげたその声も、絶叫と悲鳴にかき消された。

赤い雨が降る中、サーデイクは相変わらず先頭を切っていた。目指すは、捕虜の收容されている場所である。おそらく、エーデルもその付近にいるだろうと予想していた。

「姫様っ！ 姫様あっ！」

群がる兵士たちをもろともせずに、突き進んだ。

後ろで味方の放った火が明りとなり、長い影を作り出している。

——サーデイク、サーデイクか！？

ふと、見知った声が聞こえたような気がして。聞こえるままに向かった先に、縄で縛られた兵士たちの姿があった。戦いの際にしまったしまった同胞たちである。

よほどひどい扱いを受けていたのであろう。体中傷だらけで、血が流れ出している者もいる。

「よかった、生きていたのか！ まっている、今すぐ助けてやる——」

捕虜となった仲間達を見て、巻きつけられている縄を切ろうと剣を取り出す。

「先に行ってくれ！ すぐ向こうにあるテントの中にエーデル様はいらっしゃる、早く助けてやってくれ！」

夜襲があると気付いた瞬間に、目的は察していたのだろう。

手が動かせないため、あごをやって明かりのついたテントを示した。人影が、いくつか見てとれる。

「お前たち……わかった。必ず後続の者たちに救助してもらえよ！」
今は一瞬たりとも時間の猶予がない。

サーディクは再び馬にまたがり、手綱を握った。片手には、紅に光る槍を携えて。

エーデルのいるテントは、馬で駆ければ十秒もいらない距離にある。その中から、引きずりだされている姫の影と、何人かの兵士の姿が見えた。

右手の槍を固く握りしめ、最も手前にいた者を突き伏せる。

「エーデル様！」

抵抗する姫君の周りにいるのは三人。

ようやく……再会することができた。しかし、まだ気を抜くには至らない。

「サーディク！」

エーデルが悲鳴にも近い声を上げるが、サーディクは返事をしなかった。向かってくる三本の槍をしのいでいるのにすべての神経を使っているためだった。

一対一なら引けを取ることはないが、数的有利は覆すのが難しい。誰か一人を狙えば、他の者が攻撃を仕掛けてくる。どうしても防戦一方となってしまうのだ。

「くっ……」

次々とめまぐるしく繰り出される殺人兵器をさばきつつ、隙をうかがう。その時、視界の隅に新たに近寄ってくる兵士たちの姿が映った。

「増援か……早く片をつけなければ……」

そう思うや否や、馬を操り少しの距離をとる。そして、右手の槍を投げつけた。直線を描き、避ける暇を与えない。

最期の声をあげながら、真中にいた一人が倒れこむ。両隣の兵士たちが気を取られた一瞬について、腰から抜いた刀で切りつけた。的確に急所を捕えたその刃を返す前に、足に激痛が走るのを感じた。それに続いて、血が伝っていくのがわかる。

「このっ！」

痛む左の足をかばう間もなく、最後の一人の喉を貫く。だが、力

の限界なのか、馬上で倒れこんでしまった。

「サーディク！ ああ、こんな傷を……。誰か、誰か味方はいないの！？」

薄汚れてはいるが、囚われの身となったときから変わらぬ服装でエーデルがあたりを見回す。一人の騎兵が、かけてくるのが目に入った。他にも、やや距離はあるもののこちらに向かってくる敵の兵士。

大きく手を振り上げて、存在をアピールする。当然、呼んでいるのは味方だ。

「エーデル様、よくぞご無事で……。た、隊長！ 怪我してるじゃないですか！」

サーディクは、苦痛にゆがませながらも顔をあげた。息がだいぶ荒くなっている。

「なんの……。大したことはない……。そんなことよりも……。エーデル様を」

早く本隊まで護衛しろ、ということである。

「いや！ サーディク、あなたも一緒にじゃないと……」エーデルは怪我をした足を気遣いながらも、涙を浮かべて離れようとしなない。そんなエーデルの様子に、サーディクは声を荒げた。

「我儘をおっしゃらないでください！」

ビクツと体を震わせる。そして怖々と顔をあげた。

「今は一秒を争う状況です。……。早くクランデ様のもとへ行きますよう……。私も……。すぐに参りますから」

うって変わって優しく諭すような口調に、エーデルは涙をぬぐった。喧噪はますます激しくなっている。

それと同様に、近づいてくる足音も大きくなっていた。

「……。わかりました。ですが、これだけは約束して。――必ず生きて戻ると」

「御意」

短い言葉の中に、揺るぎない決意が表れていた。

エーデルはすばやく騎兵の後ろへ跨り二人乗りになる。倍の体重をもろともせず、命運をかけた馬が走り出す。その姿を見送って、サーデイクはゆっくりと動き始めた。

止まることを知らない血を見やる。失血死することはなさそうだが、手当が遅れれば危ないだろう。

力なく握った剣を失わないように。主を心配するかのように、愛馬もスピードを上げようとしない。

「ど……うした……もつと、早く……」

もはや倒れるのも時間の問題だった。焼かれるような鋭い痛みが、足だけでなく全身をも支配する。急ぐ心と裏腹に、体は動けなくなっていた。

「かならず……帰ると誓ったの……に……」

——サーデイクの意識は、そこで途絶えた。

未来

再び意識が戻ったとき、何故かあたりは暗かった。無意識に傷跡へ手をやると、包帯が巻かれて手当を施されているのがわかった。まだ少し痛むが、問題はなさそうだ。

だんだんと感覚が戻っていくのが感じられる。――右腕に妙な違和感があった。

「私が囚われの身となったか……」

そう、嵌められていたのは、束縛を意味するもの。――鎖だ。動かすたびに耳障りな音を立てる。自然とため息が出た。

「私は……何という不忠義ものだ。もはや、あわせる顔はない……か」

無性に悲しかった。

力が足りなかった自分に嫌気もさした。

走馬灯のように友人や主たちの顔が浮かんでは消えていく。最後に頭をよぎったのは、エーデルの笑顔だった。

――これだけは約束して。必ず生きて戻ると。

「ふふ……ははは」

中身のない、乾いた笑い声。面白くも何ともなかったが、虚しく笑うしかなかった。

「おっ！ やつと気づいたか」

サーディクと対照的に、明るい口調で話しかけてくる者がいた。牢番なのだろう。だが、サーディクにとってはどうでもいいことだった。

「おいおい、いきなり笑い出すなよ。気味が悪いじゃねえか」

おどけた表情で、軽く制止する。だんだんと薄暗い空間にも目が慣れてきて、話し相手の顔がわかるようになった。

快活そうな青年だった。およそ牢番などという仕事は似合いそうにない。

「私は、殺されるのか？」

青年は意外そうな顔をした。何を言っているんだ、という表情である。

「あんた、頭良さそうに見えて案外抜けてるんだな」

「――なに？」

まだ失われていない自尊心が、軽く傷つく。抜けてる、といわれたのは初めてである。

青年は、サーディクの足を顎でしゃくった。

「ほら、そこ治療してあるだろ。殺すつもりなら、とっとと叩き起して死刑でも何でもやってるだろうよ。生かしておくつもりだからこそ、あんたの世話をする俺が居る。……ま、そういうこった」

なるほど。確かに少し考えてみればわかる話だ。言い訳になるが、目覚めたばかりで頭が回らなかったのかもしれない。

サーディクは素直に謝ることにした。

「すまない」

「いやいや。そんなかしこまらなくてもいいって」

ひらひらと手を横に振る青年。どこか親しげのある仕草だった。

どうしてこんな仕事についているのだろうと、サーディクは改めて疑問に思った。

――いや、それよりもっと重大なことがあるではないか！

「先の戦いはどうなったのだ！？ 私達は勝ったのか？」

あえて、「負けた」という言葉を使わないあたりに、誇りが残っていた。

勝敗は全くわからない状況だった。自分は捕まったものの、エーデルは無事に救い出し、奇襲も成功している。後は本隊の追撃を待つだけだったのだ。

青年はゆっくりと口を開いた。

「あんたたちは――」

焦らすように、サーディクの目を見据える。生唾を飲み込む音が聞こえた。

「勝ったよ」

「そうか……」

体中の力が抜けていく気がした。最大の目的は遂げたのである。青年が続けた。

「聞いた話だと、奇襲を受けた所で撤退命令が出たらしい。その途中に、倒れているあんたを見つけてここまで連れてきたってわけだ。まあ、お上の意向はおそらく、実質的に人質をとって国内まで攻め込ませないことだな。あんたはなかなか人気があったっていう噂なわけだし」

国内まで攻め込ませない。それはつまり、国境付近まで敵を追いやったということだ。無論、クランデに他国を侵略するような野心はないし、国力もない。ただ、怒り狂った国民が怖いのだろう。大衆の力は、時に大きな脅威となる。

「エーデル様の行方は知っているか？」

勝利という結果を知った以上、後はその過程が気になる。最大の懸案事項は、エーデルとクランデについてだった。

「あんたが助け出したっていう姫様なら、見事に逃げおおせたらしい。まさに、白馬の騎士様ってとこだな」

かっこいいことしてくれるぜ、まったく。と、呟いて肩をすくめる。

「よかった……」

ふいに、涙がほおを伝わるのを感じた。

作戦を遂行する前にかけられた、クランデの言葉が頭に浮かぶ。

——この戦が終わったら……エーデルを嫁に貰ってくれ——。

もはやかなわぬ夢だ。

逃げることもできず、ただただ人の邪魔になりながら命をすり減らしていく余生。今まで積み上げてきた物は一体何だったのか。

全ては、一粒のしずくが物語っていて。

声をかけることもできず、青年はおり越しにおいてある椅子へ静かに腰掛けた。

目の前にあった青い小鳥はその手をすり抜けて、大空へと飛び去っていく。幸せをつかさどるものは、同時に不幸をも運命とかすのか。

――1年がたち、2年がたち、5年がたった。

サーディクが牢に入れられていることに変わりはないが、時の流れは様々な感情を生み出し、また流していった。

そして、現実さえも大きく変化させようとしている。

「おい、サーディク。ほんとにいいのか？ わざわざ隠れ続けることもないだろ。会いに行っちゃえばいいじゃねえか、愛しの姫様だってお前の姿を見たら心変わりするかもしれないねえぜ」

牢番の青年も相変わらずで。結婚もせず、職を変えることもなかった。

「ああ。私の決心に揺らぎはないよ」

返事をする者も、明るい表情だ。

その体は鍛えられており、そこらの兵士と戦っても引けを取らないであろう引き締めりぶりだった。

サーディクは5年という長い歳月をただ安穩として過ごしていたわけではない。入念な準備を行い、来るべき時を虎視眈々と狙っていたのだ。

感情というのとはわからないもので、どんなに警戒していても何事もなければ油断が生じる。どんなに愛していても次第に薄れていく。絶望も希望へと、少しずつ転化していった。

「デザルト、君こそいいのかい。今の生活を捨ててしまつて。わざわざ新しい暮らしを求めることもないだろうに」

青年の名はデザルトという。これも、獄中でサーディクが得た数々の情報の一つだ。

デザルトは、肩をすくめてみせた。

「こっちも楽じゃねえんだよ。なかなか給料も少なくてな。ま、そのおかげで俺らはチャンスを得たわけだ」

二人のいる地下牢には、他の姿を確認することができない。それもそのはず、国内で反乱が起こり、徴収されていったのだ。だが、流石にサーデイクを戦場に送るわけにもいかず、デザルトと二人でお留守番である。

腕にはめた時計を、ちらりと見やった。

「そろそろ時間だ。囚人さんよ」

「その台詞をこんなに良い状況で聞けたことをうれしく思うよ」

ふっと笑って。

牢の扉がきしみながら開いていく。

騎士を拘束していた鎖はとうの昔に解かれ、今や完全に自由の身となったのだ。

脱獄、といえはなかなかスリルがあるように聞こえるが、問題はそこではなかった。最大の難関である鍵は仲間が持っているし、あとは人がいなくなるのを待てばいいだけだから。

真に難しいのは外へ出てからである。行くあてもなく彷徨えば誰かに見つかるのが目に見えているし、なにをするにしろ金が必要になる。逆にいえば、目的と金さえあればなんとかなるのだ。

今回は、それに追加して国を出る、という困難もある。

故郷に戻りたい想いと、飛びだしたい想いが重なって、初めて成功する作戦である。既にほとんどの手はデザルトが打ってあった。

「つかぬことを聞くが、乗馬はできるよな」

「愚問だな。これでも元隊長だ、君には負けないよ」

「ほう、俺だってなかなかのもんなんだけ」

「それなら好都合だ。実は遅すぎて置いていってしまったらどうしようと思っていたところだな」

「このやろ！」

ひじで小突き合いながら、無人の階段を上っていく。不気味なほどに、誰もいなかった。

「……私の頭の上はこうなっていたのだな」

「俺には見慣れた風景だけだね」

壁に隠されている階段から見える光景は、新鮮だった。本棚やテーブル、ベッドが置いてあり絨毯も敷いてある。――普通の家だ。

と、見せかけて小型の牢屋になっているのである。襲撃される心配なども、少なくなるのだ。

「売り払わなかったのかい？」

「あんまりガンガン売ると、怪しまれちゃうからな。金目のものだけ換金しておいた。今はこいつになってるけど」

宝石や金銀の入った袋を持ちあげる。悲しいことに、それほど重たくはなかった。

「なるべく時間は稼げるようにしてある。さっさと逃げるぞ」

「ちよっと待った。まだあれをもらってないぞ」

「……ほらよ」

渋々取り出したのは、一枚の仮面。

革でできており、顔に合わせて形が変わるように設計されている。普段の生活でつけていても、不便はなさそうだ。

「ありがとう。さっそく使ってみるよ」

「……………」

複雑な心境だ。

できれば、こんなものは使ってほしくないのだが。

――心を封印するため。

あくまで予想でしかないが、大体見当はついている。現実とはつくづく酷なものだと、痛感した。

「あんたの姫君は――」

「いいんだ。エーデル様は彼と幸せになる。それでいい」

仮面の上からでは、表情が読み取れない。わかるのは目と口だけ。外界との交流を閉ざすのにこれほど適切なものはなかった。

エーデルは結婚した。

隣国の王子とである。優しく、賢明で評判もいいらしい。その二ユースを聞いた時、サーデイクは三日ほど口をきかなかった。四日

目にようやくおはよう、と挨拶をしただけである。

残酷のようだけれども、仕方のないことだったのだろう。結婚のできる時期は、限られている。いつ帰るともしれないサーディクを待ち続けるわけにもいかないのだ。

「……わかった。いこう」

重苦しくなった雰囲気拭えないまま、二人は馬上の人となる。乗り手の心情など気にした様子もなく、景気よく駆け出して。

「こりゃあ……予想以上だな」

「まさか、反乱の規模がそこまで大きかったとは」

国境沿いに、大きな門がある。普段は解放されていて、ずらりと並んだ兵士たちが目を光らせているのだが、この日は異かと思えるほど人影がなかった。

大歓迎、といった風に関放たれている門をくぐり、いとも簡単に国境を割ってみせる。

「この隙に乗じて攻められる、とか思っていないのかねえ」

「それだけ手一杯、ということだろう。いろいろと助かる反乱だ」

脱獄・亡命と大活躍である。

「時の運ってやつだろうな。俺たちやついてるぜ」

「そうだな。実に幸運だった」

そのままグランデ領内へ足を踏み入れる。

「懐かしい――」

サーディクは、まだ新入りだったころ何度も訓練に訪れている。

馴染み深い景色であった。

少々厳つい砦が目の前に構えているが、特に心配はない。ちょっとした検査の後、すぐに通してもらえらるだろう。この国は、移住してくるものを厳しく取り締まるようなことはない。

待ち構えていたかのような一人の兵士に誘導され、いくつかの質問を受ける。特に差しさわりのない答えを返し、再び歩を進めた。

「向こうの奴らも、こっちにくりゃいいのにな」

「そうはいかないのだろう。長年住んだ土地は簡単に手放せるものではない」

「そんなものなのかなあ……」
デザルトは納得がいかないようだった。あまり物事に執着するような性格ではないのだ。

サーデイクが道先案内を務めながら、後ろを行くデザルトに振り向いてみせる。

「だから私もここにいるのだ。ほら、そこが目的地だぞ」

寒村、と形容するのがふさわしいだろう。ところどころに家が見受けられるが、ほとんどは田畑でおおわれている。——よく目を凝らすと、雑草も多い。人知れず移り住むには絶好の場所といえた。

「たしかに。ここなら勝手に住み着いてもわからねえな」

「一人くらい増えた所で、何も変わらないだろうさ」

何か感慨を伴った声で。

「君の目指す場所は、ここからさらに道追いに行けば見つかる。そろそろお別れということだな」

道は分かれ、旅人もまた別れる。

目標も生き方も違う二人は、同じ道を途中まで歩んできただけ。最後まで一緒にいるわけにはいかない。己が望むように生きたいと願うのなら、なおさらだ。

一人は栄華を手に入れようと。

一人は孤独を受け入れようと。

「逃避行にしちゃ、あっけなかったけどな……」

「その分、地下牢にいた時間が長かったのだよ。それに、楽しいと時間は飛ぶように消え去っていく」

相棒に仮面の笑顔を見せて。

相棒も、あっけからんとした表情で応える。

「まあ、あんたと過ごした五年間も悪いもんじゃなかったさ。思い返せば、しゃべってばかりだったけどよ——俺も職務怠慢だねえ」
そういつて、苦笑する。

最初に出会った時に、まさか脱獄する仲になるとは思わなかった。予想できるはずもないことだが、現実はどう転ぶか分らないものなのだ。

デザルトは、このまま街を目指すことになっている。そこで汗水をたらし、行く末は大富豪になろうと目論んでいるのだ。無論、成功する保証はどこにもないが、夢を追うのが彼の生き方である。迷いはなかった。

「私にとっては、これ以上ない素晴らしい牢番だったよ。もし君でなかったら、私は命を絶っていたかもしれない」

「オイオイ、物騒なこというなよ」

「決して大げさなことではない。暖かく私の心をほぐしてくれたのは君じゃないか」

「そんな大層なことじゃねえよ。俺はただ、話し相手になってただけだ。希望を取り戻したのはお前自身の功績だからさ」

「いや。――デザルト、今までありがとう」

謙遜してはいるが、どちらかが欠けていれば歯車は動かなかったのだ。

サーディクとデザルト。二人の男がお互いを認め、支えあった結果である。

「どういたしまして、とはいわねえよ。それから、サヨナラという気もない」

「なぜだ？ 君とはここでお別れだろう？」

「だから頭が固いつていわれるんだよ。ここは『また会いましょう』が本命だろ」

「ああ、そうか」

私も変わっていないな、と思う。変わり過ぎたこともいくつかあるのだが。

――また会いましょう、か。

「また、会えるのかな……」

「時間ができしだい、遊びに行くさ。できればうまい酒でも持って」

「そうか……楽しみにしているよ」

「じゃあな！」

そろそろ踏ん切りをつけなければ、とばかりにデザルトが後ろも振り向かず馬を駆り立てる。遠ざかっていく後ろ姿を眺めながら、サーデイクは思った。

ついに、自由になったのだと。

——自由。何と甘美な響きだろうか。その裏に隠されている不安や苦しみを見事に隠している。大衆に守られていないということが、どれだけ頼りなく、無力であるか。真に理解している者は少ない。なんだかとらえどころのない焦燥感に襲われて、振り向いた。

「洞窟……か？」

遠くてよく見えないが、十分すぎる距離をとっている家々の向こうにぽつりと口を開けた洞窟があるようだ。

足元まで茂った草をかき分けながらしばらく進むと、それは姿を現した。

入口は割と広く、大人が両手を広げて三つ分ほどはありそうだった。陽の光が差し込み、いくばくか奥まで照らしている。

岩石の性質のためか、澄んだ湖のように青白く、それでいて透きとおっていた。

「美しい……」

——今はまだ知らない、その美しさを——。

経緯

あれがこうなって

これがそうなって

それがああなった

「——という感じらしいわよ。で、どういうわけかサーデイクはグラナートの誓いを手に入れて、その洞窟に隠したというわけ。しかしバッドエンドねえ……愛しの人は取られちゃったわけでしょう。とり返すくらいの勢いはなかったのかしら？」

民宿「幻夢荘」の部屋にて、夕食として支給されたご飯をかつ込みながらの会話である。久しぶりのまともな食事で、二人とも箸が止まる様子はない。幸いなことに、ご飯と飲み物はお代わり自由であつたので、心おきなく満腹になることができた。

「陰ながら見守りたかつたんじゃないですか？　どうやらあまり押せ押せない恋ではなかったようですし」

はー、と幸せな溜息についてロートがベッドの縁にもたれかかる。その上では、イリスが大の字になって寝ころんでいた。時刻はもう幼子があくびをしている頃。

満腹のためか、いやに眠たかった。

「どちらにしろ、グラナートの誓いがあるとわかっただけでも大収穫ですよ。後はゆっくり探すだけです」

あちらこちらでの聞き込みを終え、キッチンと夕食の前に帰ってきた二人。

イリスの服が変わっていたことと、いつの間にか腰の袋からいくつかの金品がなくなっていたことに驚きつつもお互いの情報を交換して、今に至る。

部屋に一つだけおかれたランプと、僅かながらの月光によって灯りをともしている。満天の星がまたたきながら闇を支配していた。

ランプの中で煌々と燃え続ける火が揺れて、影が揺らいだ。

「そういえば、明日が仮面祭らしいですよ。知ってました？」

「ふーん……」

眠いせいか、興味のなさそうな反応をする。

大あくびをしながら、口を手で押さえる。かなり疲労がたまっているようだ。

あくびはうつるというもので、ロートも眠そうな素振りをした。

「ふあああ」

こくり、こくりと瞼が閉じようとする。

誘惑に負けるのは、心地よかった。

「じゃあ……明日は仮面でも持っていきましようかね……」

その言葉も、届いたものかどうか。

——眠りはなぜ時計の針を早く進めるのだろうか。

東に向いた窓から朝日が差し込んで、眩しかった。天然の目覚まし時計である。

春の夜明けは遅すぎもせず、早すぎもしない。ちょうど光と闇を二分する。

「ふあああ」

眠る時も起きる時も、どうしてこう間の抜けた声しか出ないのだろう。安心感の表れだと思えないこともないのだが。

同じように寝ぼけた様子のイリスが、上体を半分だけ起こした状態で目をこすっていた。

寒さや人の気配ではなく、陽の光で目覚められるというのはなんと幸せなことなのだろう。

「おはようございます」

「ん……おはよう」

昨日あれほど詰め込んだというのに、既に胃の中は空に近く。食

べ物を催促する音がねだるように鳴り響く。どちらから出てきた物とも知らず、

「朝ご飯貰ってきて」

「……はい」

「飲み物は冷たいやつね」

「わかりました」

まだ半分とじている瞼を強引にこじ開け、立ち上がる。たまっていた疲れはすっかり抜け落ち、体がスムーズに動いた。

朝の冷気で程よく冷たくなっているノブを回し、手前に引くと風が吹きこんできた。

春風などではなく、ただ単に空気の流れのようだ。フードがめくれないように、軽く頭を押さえた。

階下において主人から出来たての朝食とあたたかい挨拶をもらい、盆に載せた飲み物をこぼさないように部屋へ戻る。

ドアの前に立ち、両手がふさがっていることに気付く。

「ししうー。開けて下さい」

「……はいはい」

二度寝でもしていたのか、のっそりとドアが開かれる。

ロートの持っていたカップをひったくると、一息もつかずに飲みほした。

「ぷはーっ。あー美味しい」

「よかったですねえ」

二人分の食事が載った盆を、一つだけある机の上に置き配っている。

「それにしても美味しそうですねえ……」

色とりどりのおかずに加えて、誘うように湯気を立てるその姿をみていると、自然に食欲が増した。

綺麗に並べられた料理を前に二人で向き合い、両手を合わせる。

『いただきます』

合唱のように重なった。

箸を進めつつ、ロートが話を始める。

「今日の予定はどうしますか？」

「どうしようかね——何か考えてよ」

「考えてよ、といわれても……とりあえず宿から出ましょう」

「その前に洗顔が必要ね」

「……情報収集の続きでもしましょうか？　今度はもう少し詳しくその前に洗顔を必要ね」

「そろそろ限界よねえー。一般人から聞くのは」

たとえ馴染みの深い話だとしても、詳細な部分まで覚えているわけでも、正確な地名を知っているというわけでもない。これ以上の発見は難しい。

「歴史家、とかいるのかしら」

「いそですよ。けっこう深い謎を持っているみたいですし、興味のある人は多いでしょう」

「じゃあ、ロートはその人たちに当たってきてちょうだい」

「八つ当たりですか」

「誤解されるようなことをいわない。あたしも別行動でいろいろ調べてみるから、そっちの筋はよろしく」

ひらひら手を振るイリス。

「それも誤解されそうな発言ですね……と、それはさておき了解しました。明日あたりには動きだせるようにしておきます」

「よろしくー」

おそろしく人任せな雰囲気で、朝食を平らげたイリスが寝ころぶ。

「食べてすぐに寝ると太りますよ」

ロートは肩をすくめてみせた。

「うるさい！　あたしは太らない体質なの！」

世の女性が聞いたら泣いてうらやましがるだろう。

今日もさして変わったことは起こらないだろうな、と心の中で呟く。仮面祭があるくらいか。適当に遊んで、グラナートの誓いを手に入れば問題はない。

あくびをひとつしながら、ロートは伸びをした。関節がいくつかポキパキとなる音が聞こえる。

もっと柔軟性を身につけなさいよ、というイリスの説教は無視することにきめて、ふらりと外に出たのであった。

さほど歴史のない図書館だが、使われない場所に埃は溜まっていた。ロートと男が対面している、辞書のような無駄に分厚い本に囲まれた床はうっすらと白くなっていた。

先ほどまで、騎士サーディクの詳しい話を聞いていたところである。街中探しまわった挙句、意外と近くにいたのは驚きだった。

まさか宿から数メートルと離れていない家に住んでいたとは……。『ありがとうございます。大変参考になりました』

丁寧な頭を下げる。

邪魔なのではないかと思えるほど立派な白銀のあご髭をたくわえた老人が大儀そうにうなずいた。

『若いのに、結構なことじゃ……。歴史に興味を持つ子は年々減っておる。お前さんみたいな子は珍しいよ』

『――そうですか』

歴史や物語の裏には、必ず何かが見え隠れしている。

そこから何を見つけ出し、どう生かすかが重要なのだ。それなのに、興味すら持てないとは――。

『今を生きられればいい、ということなのじゃろう。何と嘆かわしい』

世界中どこでも、若者は老人の理解を超えるものらしい。それが良いのか悪いのかは別として。

もう一度お礼を言って、記憶のあいまいな部分がいくらかあるということで連れてこられたひと気のない図書館を後にする。

仮面祭が今夜だったこともあり、待ち合わせの時間は早めにしてある。

ロートは散歩気分で通りを歩く。

暑くもなく、寒すぎもしない気温がとても気持ちいい。自然と足も動いていった。
が。

待ち合わせていた露店の前にイリスはいつまでたっても現れず、かなりの待ちぼうけをくらわされた。そのうえ、結局ロートが探しに出ることになったのだ。

心配よりも、多少の怒りの方が心を占めている。

「どうせ買物でもしているんでしょう……ドレスだ、とか何とか言っ

普通に考えればそうなる。

試着室にいくつもの洋服を持ち込んで、どれがいいかと悩んでいるイリスの姿が目に見えよう。最後には全部買い取るのだろう――いつ着るのだから。

とかなんとかぼやきつつ、歩きまわっていたら日が暮れてしまった。

そして――あの少女、サラ・ハーレットに出会ったのである。

経緯（後書き）

ようやく冒頭につなげました。
時間軸の移動にはお気を付けください。

城内

さあ 私と踊りましょう

仮面をつけて

むかしむかしの 人を想えば

「ところで、あなたの名前ってなんだっけ？ まだ聞いてなかったよね」

夜道を二人で歩きながら、隣にいるロートへ話しかける。白いフードをかぶったロートと、豊かな黒髪を伴うサラの対比が、妙に似あっていた。

「僕は……ロートです。あなたはサラ・ハーレットさまですか？」
本名を告げたものか迷ったのだが、師匠であるイリスも自分の名を明かしていたようだし、ロートと名乗った。

「え？ 僕！？」

「え、あ、いや……」

素っ頓狂な声を上げるサラ。ロートは直感的に否定していた。男だと言ったら、何か悪いことが起きるような気がしたのだ。

「こういう一人称なんです……あはは」

「あ、そうだったんだー。てつきり男の子なのかと思ったよ！」

「ま、まさか……」

力のない笑い声。

「男の子だったら、お城へ招待できないもんね。危ない危ないって」
ちらり、と髪の間から見えた眼は鋭くて。

一瞬だけ足を止めた。

「どうしたの？」

「……なんでもない」

先ほどから何度となく感じる、全てを見透かすかのような瞳。夜よりも深い黒ではないかと疑うほどだ。得体のしれない相手だった。可愛い顔の裏には何が隠されているのか――。

「あ、そうそうさっきの質問の答え。あれは大当たりだよ」

思い出したようにサラが言った。

さっきの質問というのは“あなたはサラ・ハーレットさまですか？”とことだろう。

「よく知ってたね。もしかしたらあたしのこと調べてたりした？」

「ちょっと噂を小耳にはさんただけです。あなたほどの地位なら調べなくとも分かってしまいますよ」

質問の一つ一つにドキリとさせられる。

隠し事さえなければやましいことは何もないのだが。

「それも、そうか」

とっさの言い訳に納得したようで、首を何度か上下に振ってから再び歩きだした。

寿命が縮まりそうだ。

「そういえばさ、ドレスとか持っていないの？ その服じゃ踊れないよ？」

痛いところをついてきた。

気は乗らなかったが、着替えるより仕方無いだろう。

「貸していただけませんか？ 生憎、今は一着も持っていないので……」

「いいよ。いくらでもあるから、持っていて」

何故か嫌みに思えない気楽な口調。

ゆとりが全身からにじみ出ているようだ。

「持っていてはしませんけど……ありがとうございます」

「遠慮しないで。じゃんじゃんオッケーだから」

「いえ……」

後ろめたさもあって、だんだんと押され気味になるロート。

師匠よりも押しが強いかもしれないと、僅かながら思うようにな

った。

他愛のない会話を繰り返しながら、とうとう城門に着いた。

その間にわかったのは――美女ばかりを集めているのはサラの趣味であること。舞踏会には貴族たちも参加すること。ダンスの間は無礼講であること。などだ。

一通りの状況を把握することはできた。修羅場を何度となく潜り抜けてきた身として、これだけの情報があれば大丈夫だろうと思う。

「けっこう、新しいんですね」

外からも見えたとおり、未だに壁は綺麗なままで汚れも見当たらない。

掃除婦がよほど優秀なのだろうか。

「出来てからそれほど経ってないからねー。んー、あたしと同じくらいの歳かな」

少し考える素振りを見せる。10数年というところか。

「200歳だよ」

「嘘!？」

「冗談だよ! 大体そのくらい。グラナートに越してきてからお城が立つまでしばらくあったから、お父様はもっと長いけど」

これも新発見だった。

城内には、サラの威光で衛兵の検査もなくすんなりと入ることができた。

細かい彫刻の施された獅子の呼び鈴を鳴らすと、中から執事と思われる老人が出てきた。不自然に伸びた背筋と、完璧なまでに着こなされたスーツが特徴的である。

「お嬢様、お帰りなさいませ。そちらの方は、お客様でございますね」

疑問調だったが、慣れているのかほとんど確認のようなものだ。扉の隙間からは賑やかな音楽と話し声が聞こえてきた。

おそらく、その中にイリスも交じっているのだろう。

「そう。ドレスが無いようだから、お連れして差し上げて」

「かしこまりました」

優雅に一礼して、執事が

「では私の後に着いていらしてください」

と言った。

ひと際明るい室内だった。シャンデリアがきらめき、色とりどりの料理と服が豪華さに箔をつけている。

重厚な絨毯が敷き詰められた階段を上がり、2階の廊下をいくらか進むとだいぶ人氣がなくなった。あれほど騒々しかった音楽すら、ここでは耳に入ってこない。

等間隔で並んでいる部屋の1つに案内された。入ってみると、これでもか、という風に吊り下げられた衣装の数々が整列している。

部屋いっぱい詰め込まれていて、奥には更衣室と思われる小部屋も見受けられる。

「どれでも好きなものをお選びください。わたくしは外で待っておりますので」

気配もなく背後から去ると、これまた音もなく扉を閉めた。

ロートは改めて部屋の中を見回す。

「……なんでこんなにあるんだ？」

男の子として至極まともな疑問が、頭に浮かびあがる。そして、手近にあるものを取ると、部屋の奥へと向かった。

「よくお似合いでございますよ」

万民に使えるであろうこの台詞も、嬉しくなかった。当然だろう、女性に見られることが苦痛でしかないのだから。

ロートは苦虫をかみつぶしたような顔になりかけたが、だいぶ無理のある笑顔に変えた。

執事は、それを緊張のためと受け取ったのかあまり追及せず、再び静かに歩きだした。先程通った道をそのままたどり、階段を降りたところで

「では、仮面をお付け下さい」

ロートは置いてきた持ち物の中から取り出しておいた、地味な仮面を取り出した。妖しげな露店で手に入れたものである。

忘れかけていたが、持ってきておいて良かったと思った。いつも腰につけている、袋に入れてあったのだ。先見の明というやつだろうか。

派手な仮面をつけている人が多い中で、何の特徴もない地味なものを使うのは、かえって目立つような気がした。とてもよく着こなせてしまったブルーのドレスと相成って、なんだか人々の視線を集めているように思える。

とりあえず、師匠でも探そうと一番手近にあったテーブルに向かって歩き出そうとしたとき、後ろから声がかかった。

「あら、よく似あってるじゃん。よかった」

執事とのやり取りをどこかで見ていたのだろう、まだ素顔のままのサラが仮面越しに話しかけた。

ロートは苦虫をかみつぶしたような顔をしたが、サラからは見えなかった。

「御蔭さまで、助かりました——ところで、その。師匠はどこか知りませんか？ 皆さん顔がわからなくて、誰が誰だか……」

仮面の持つ匿名性によって、舞踏会の出席者は見分けがつかない。服装から判断するしかないのだが、それもなかなか難しいことだった。

「あーごめん。あたしもよくわかんないんだ。出席者の数も多いし、みんな同じような体形だしね」

たしかに、貴族なだけあって小太りの人が多い。とは言っても、なかなか品格が漂っている者もいることにはいるのだが。

いくら主催者といえど、全てを見分けるのは困難だろう。無理のない話だった。

ロートはあまり期待していなかった様子で、落胆の色を見せることもなく、平然としている。

「そういうことなら、後は僕が探しますよ。大丈夫、すぐに見つかると思いますから」

そう言い切るだけの根拠はいくつかあった。

まずは、イリスが抜群のスタイルを持っていること。顔が判別できなくとも、体軀で十分に見分けることはできる。仮面など物の数でないのだ。それに紫の髪は隠しようがない。

もう一つ、イリスは酒に酔うことがない。幸とも不幸とも言い難い体質であるが、重要な要素となる。頬が赤くなっているかどうか確認することはできないものの、酔っているならば言動で分かる。そこは、経験のたまものだ。

「ほんとう……?」

サラは納得しないように唇を尖がらせた。力になれないことが悔しいのである。

「本当ですよ。心配ありません」

安心させるように微笑みかけて……仮面をしていたことに気付いた。どうしたものかと悩んだ挙句、声を出して笑ってみせることにする。なるべく朗らかにしたつもりだが、僅かに緊張の色がうかえた。

サラはくると反転し、ロートに背中を向けた。

右の指が、服の裾をいじっている。どこか齒切れの悪い、そんな気分なのだ。そして鬱々とした表情になった。

数歩だけ歩いて、また止まる。

「どうしましたか?」

「うん……面倒くさいなあ、と思って」

両手を後ろに組んで、顔だけ振り向く。苦々しげな雰囲気である。日頃、明るいサラからはなかなか想像しにくい様子だった。

ロートが問い返す。

「面倒くさい?」

「今から着替えなきゃならないの。ほら、一応お客さんの前にお披露目、ってこと。あたしもなかなか大変なのよね」

「ああ、なるほど……」

あれだけの服を所有しておきながら、着替えるのが面倒くさいとは何事か、と思った。いまいち理解ができない。

「買うのが楽しいのであって、実際に着るのはあんまり好きじゃないんだよね……」

呟くように下を向くが、同情のかけらも湧いてこなかった。矛盾というのは世の中にあふれているのだろう。内容は様々だが、これはかなり贅沢な間違いだ。

ロートは、顔に浮かんだ眉間のしわを見られなくてよかった、と胸をなでおろした。

「あー、だるい……」

遠ざかっていく後ろ姿を見送りながら、社会について考える。

——うん、わからないな。

そう確信し、イリスを探すのに専念することにした。

月光

あまり気は乗らないが、周りを鑑賞しつつイリスの姿を求める。フロアの中央には人が集まり、ダンスを楽しんでいる。誰もかれもが派手な色彩のドレスや存在感のあるスーツを着込んでおり、場を包みこむ楽団の演奏が高級感を付け足していた。

その周りには休憩と間食のために用意されたテーブルと椅子が、踊る者たちを囲むように配置されている。ダンスをするのには広めのスペースが必要のため、休んでいる者の方が多かった。仮面越しに談笑をしている人もあれば、静かに食事をとる人もあり、または誘いを待つ者もいる。

割と回りが早いのか、次々と舞踏の輪に加わっては抜けていった。一通り見たところでは、イリスを確認することができない。

今まで流れていた落ち着いた雰囲気曲が変わって、早足の曲調になった。

それに影響されてか、人々も腰を上げ始める。見渡しやすかった会場は立ち上がる者たちで遮られた。

一瞬、イリスのような面影を見たような気がして、ロートは目を凝らす。

「くそ……こう人が多くては……」

思うように直進できない。急がば回るべきなのだが、見失わないためにもまっすぐ通ったかった。

しばらく抵抗を試みたものの、恰幅のいい貴族たちの体形に阻まれ、あきらめた。小走りで大きな円を描きながら、師匠を発見しようと視野を広めに保つ。

無礼なやつだと冷ややかな視線を送られたが、ロートは気にしなかった。

「――いてっ！」

遠くを傍観するばかり、近辺への注意が散漫になっていた。

小柄なロートはぶつかった拍子にしりもちをつく。ドレスからはみ出た脚は透き通るようで、女子のそれと比べても負けないほどだった。

床にあたった拍子に痛めた腰をさすりつつ、立ち上がるとそこには見知った顔があった。

「ジャ、ジャックさん……どうしてここに？」

元から大きめの蒼い瞳をさらに開いて、ロートは驚きをあらわにする。対するジャックは自然に整った顔の中に、軽い好奇心の焰をちらほらと見え隠れさせていた。

相変わらず場違いな茶のコートを着込み、この世に苦労なんてないと言わんばかりの呑気な笑みを浮かべている。おそらく、この場で唯一仮面をつけていない人だろう。

「おや、お嬢さん！　どうして俺の名前を知っているんだい？」

ロートは自分が非常にわかりにくい格好をしていることを思い出し、声をひそめてジャックの耳にささやいた。

「実は――僕です。ロートなんです。わけあってこんな服を着てますけど……」

「ええ！？　まさか君がロート君だなんて！」

「そ、そんな大声で叫ばないでください。男であることは秘密なんですから」

ロートの心配をよそに、よく響く声で暴露されてしまった。あわてて制止するが、何事かと視線が集中する。眼だけ覗いたいくつもの仮面が同じ方向を向いていると、得体も知れず不気味だった。

「それより、何故ここにいますか？　たしか師匠の財布を探していたような気が……」

哀れなことに、ジャックはイリスに嵌められて本人の懐にある財布を探しに行っていたはずだ。それがどうして舞踏会にいるのか。

「あきらめた」

「それは駄目でしょう！」

あつさりと言つてのけたジャックに、ロートがつつこむ。だまし
た方も悪いとは思ふが、途中で宣言を取り消すというのもよくない。

「冗談だよ。本当は、まだ探している途中なんだ」

「あ……そうですか」

多少なり罪の意識を感じながらも今更ウソでしたとは言えず、適
当に相槌をうった。疑うことをしないジャックの心に、眩しさを覚
える。

「で、その時サラとかいう子に誘われてね。舞踏会と言うから、楽
しそうだし、来てみたというわけだよ」

「あれ、でも……女性しかだめだと聞いたのですけど」

「いや、そんな話はしていなかったと思うよ。現に、俺もここにい
るわけだしね」

「そうですね……」

たしかにその通りであつた。ならば、サラの言つたことは嘘だつ
たというのだろうか？ いったい、何故？ 何のために？

「にしても——よく似あつてゐるねえ、そのドレス。そこら辺の子た
ちよりもよっぽど綺麗なんじゃない？ いったいどんな化粧品使つ
てるのかなあ。教えてくれない？」

「そんなものは1滴も使っていません！ というより、それは本当
に嫌みですよ！ ねえ！？」

「化粧じゃないの！？ じゃあ——どんな食生活を？」

「……もういいです……」

泣きそうになるロートを不思議そうな瞳で見つめるジャック。彼
に悪気はない。

「ところで、師匠を見かけませんでしたか？ 探しているんですけど
ど、なかなかいなくて——さっき居たと思ったらジャックさんとぶ
つかつて見失つてしまつたんです」

「ああ、それなら——」

「知ってるんですか？」

「いや、全くわからない。すまないね」

「それよりも思わせぶりの前振りに謝ってほしいです」

なんだか疲れてきたロートはジャックから離れて再びイリスを探すことにした。きよろきよろと辺りをくまなく見回すが、なかなか発見できない。

音楽が変わったせいもあるのだろう。立ち上がって踊る者が増え、その分休憩している人が少なくなった。前曲は流れていても心地よい程度だったのだが、どうも耳に入ってきてしまう。音楽の影響は大きいな、と改めて思った。

ジャックに邪魔をされる前に、イリスとおぼしき人影を見た場所に行ってみた。既に人の姿はなく、誰も乗せていない空っぽの椅子だけがぽつんと置いてある。

やはり人違いだったのかと諦めかけたその時。トントン、と肩を叩くものがあつた。肩のはみ出た服装なので、触れた部分がくすぐったかった。

誰だろう、と少々驚きながら振り向く。

思わず声を上げそうになった。深紅のドレスに、大きく開いた胸元が妖艶さを強調している。紫色の艶やかな長髪が流れるように波打っていた。間違えようもない、イリスである。

街に入った時に強奪まがいのことをして手に入れたけばけしい仮面をつけていて、素顔の時と同じように人目を惹いていた。

いかにも目を引く衣装と打って変わって、その声は控えめだった。

「あんた、ロートでしょ？」

「わかってるのなら確認しないでください」

ふてぶてしく答える。

イリスが見つかったのはうれしいのだが、ジャックとの遭遇のせいでいささか不機嫌だった。イリスが小声なのもジャックに原因があるようだ。

「あいつに見つかるといろいろ面倒だからね……ロートも隠れてなさいよ」

「いえ、さつき思い切り会ってしまったんですけど」

こそこそと移動し、中央から遠ざかる。ジャックの気配はなかったが、それでも声は幾分か小さめである。

知ってるわよ、と吐き捨てて。

「あいつの声でロートが居るってわかったんだから。ま、どうせあたしを追ってきたとかでしょ」

誰のせいだと思っているのか。いつまでたっても待ち合わせ場所に姿を現さなければ、心配するのは当然だろう。

そう思ったが口には出さず、肩をすくめるのだけにとどめた。苦々しい表情もセツトで付いている。

街を歩けばほとんどの人が振り向くであろうその容姿に、苦汁をなめたような顔は妙な感じだった。

もう一人の美女が、なにかを言おうとして。

突然、それまでこんこんと尽きることなく広間を満たしていた音が止んだ。それに驚いた人々も動きを止め、代わって静寂があたりを覆う。

落差が大きすぎて、なにか異様な雰囲気だった。一体、次に何が起こるのか。

楽団のいる、少しせり上がった舞台の端から、一人の少女がハイヒールの音を響かせて登場した。すうっと息を吸い、己を見つめる無数の目と対峙する。

「みなさん、今日はお越しいただきありがとうございます。私、サラ・アンリ・ハーレットⅡセリナが代表して、お礼申し上げます」

ロートのものとはまた違う、装飾の多い純白のドレスを着こみ、髪を複雑に結っている。何段かに束ねられた黒髪はもはや芸術的といっても過言ではなかった。

「残念ながら両親は体調が優れないとのことで、私が代役を務めさせていただきます」

堂々とした喋り方に、どこからか拍手が飛ぶ。それにつられて他の者が呼応し、またたく間に手をたたく音が会場を支配する。

拍手の鳴りやむのを待って、サラが再び話し出す。

「急なことでしたので、カンニングペーパーを作る間もありませんでした」

何人かが大きな笑い声をあげ、ざわざわと。それ以外の人も静かに笑った。

「なので、私の話は短めに切らせていただきたく存じます。みなさん、どうぞ楽しんでいってください」

代表者の挨拶としては、すこぶる少なかった。

通例ならば興ざめするほどに長くてつまらない話が延々と続く。当然、話しているのは権力者であり勝手な行動をとるわけにもいかず、参加者は辟易するのだ。

そんな意図をくみ取っていたのか、はたまた本当に何も話すことができなかったのか分らないが、とにかく異例の事態であることには変わりない。

サラの姿が袖に消えるのを皮切りに、一気に騒々しくなる。その一角に、ロートとイリスの話し声も交じっていた。

「あれで良いんですか？ 短すぎるのも逆に失礼になりませんかね」
いつの間に取ったのか、手に持ったサンドイッチをつまみながら半分ほど独り言のように呟く。夕食は取れそうにないので、この機会に済ませるつもりだ。

パンは柔らかく、中に詰まった瑞々しい野菜とハムもロートの舌を楽しませた。

「いいんじゃない？ 音をたてないように食事するのも大変だから助かったし」

この二人、照明が落ちた瞬間に移動をはじめ、両手に食材をつかんでいた。こうでもしないと、冷たい視線が突き刺すのだ。貴族の世界もいろいろと堅苦しい。

イリスが持っているのは同じくサンドイッチ。

こちらはチーズと鶏肉が使われており、濃厚だった。

「問題はそこですか」

ピントがずれている。

「いいのよ。物事なんて解釈次第なんだから。今の短さだって、悪く考えれば単に面倒くさいから省略しただけかもしれないけど、よく考えればあたしたちのことを思ってたでしょ」

絶対違う、と思ったが口には出さなかった。言えれば頬をつねられるか何かされたに違いない。

最期の一口をほおりこんで、リスのように懸命に口を動かす。通りかかった拾者から飲み物をもらって飲み下すと大きく息をついた。「あー、美味しかった」

「同感です。実にいい味でした。この後に晚餐でもあれば最高なのですけど、そういうわけにもいかなそうですね」

あくまで踊るのが目的である。

何と言っても舞踏会であるから、そこまでのごちそうは期待できない。ましてや、ロートたちに踊る気は毛頭ない。

イリスの居場所を追ってきただけであり、招かれたとはいえ長いこと居続ける理由もさして見当たらなかった。そろそろ潮時であろう。

「帰りますか」

「そうね」

「……やけにあっさりしてませんか？ てっきりもうちょっと食べてから、とか、詰め込んでから、とか言うもんだと思っていましたけど」

「……………あんだ、あたしのことをどう思ってるのよ」

「特に何も」

「それでもそれでムカつくわね——、まあいいわ。引き揚げるとしましょう」

少しだけ目を細めてから、イリスが言い放った。

足を踏み出した時に、あ！ とロートが思い出したように声を上げる。

「この服を返してきます。ローブを返してもらわないといけません

し」

「あー、いつてらっしゃい。あたしは先に戻ってるから」
片手をひらひらと振りながら去っていくイリスの姿を見ながら思った。

——あのドレス、本当に貰っていく気なのだろうか……。おそらく、サラは貰っていいと言ったのだろうが、実際に持ち帰るのはどうにも図々しい。

絶対あのような大人にはなりたくないな、ということを再確認して駆け出そうとする。その瞬間に、踏みつけた裾が体を圧迫し盛大に転ぶ。

幸いなことに誰にも気づかれなかったようだが、なんとなく照れ笑いを浮かべながら内心で舌打ちした。やはり、慣れない服は着るものでない。

「僕は女じゃないのに……」

何の所以でこんな苦労をしなければならないのか。

「そういえば——」

一筋の考えが脳裏に走る。

「いや、まてよ……。そんなことは——」

もしサラが、男であることを知っていたのなら。

それを見抜いた上でドレスを着せていたのだとしたら。

「まさか——」

背中を一筋の冷たい汗が流れた。

「ふーん。あそこが例の……」

漆黒の闇が支配する中、小さな篝火だけがうかがえる。

大きく開かれたその瞳は、照らされて明るくなった場所をじっと見据えている。入口だけが姿を現し、その奥までは覗くことが出来ない。

最後に一瞥して、音もなく去る。

その後に残った風は、月光を切り裂くだけであった。

月光（後書き）

いつもお愛読ありがとうございます。

刺客

丸じゃないのね

いや、四角じゃないですから……。

家々から光は消え皆が寝静まっている頃、不自然なほどに気配のない男が足音一つ立てずに道を闊歩している。道路は舗装されているので歩く音がよく音が響くはずなのだが、砂利の転がる僅かな音さえも夜空に届かない。

その頭上には隅から隅まで埋め尽くさんとしているかのような満天の星と、一線を画した満月が顔をのぞかせている。銀色の光がわずかに男の影を映しだしていた。彼の気配のように儚げだが、そこにはしっかりと存在していることは確かだった。

深夜特有のどこか不安にさせるような静寂が男を包み込むが、全く気にはならない。むしろ、安堵を感じるほどである。男にとって暗闇はすみかのようなものだった。光の当たらない世界でずっと生活してきた。そして、暗部の人間として暮らしている。

胸のポケットに入れた一枚の手紙を届けるだけ。簡単な任務だ。本来なら下っ端にやらせるところだが、直々の頼みでは仕方なかった。それに、宛先はなかなか手強いという。だが見つかりさえしなければなんの心配もない。

問題はない、そう心で何度も繰り返した。

要は気づかれなければいいだけの話なのだ。見つからなければ、闘いにもならない。正体に気付かれる可能性も低くなる。

腕に自信はあった。この世界では凄腕と恐れられているほどだ。だが、それに対するおごりは微塵もない。常に最も効率的な方法で任務をこなすだけ。それだけだ。

「ここか」

誰にも聞こえないような、唇を動かしただけのような。声にならない言葉を発する。

常人なら暗くて見えないような看板、男の目には鮮明に「幻夢荘」と映る。わざわざ見なくても、街のことなら熟知していた。誰がどこに家を持っていて、どの道がどこに通じているのか。男の頭の中には地図よりも正確な情報が詰まっている。

侵入の方法は既に決めてあった。

窓から入り込み、痕跡を残さずに去る。単純で明快な、それでいて効果的な手段である。

さて、早めに終わらせてしまおうと、跳躍しようとしたその時。何者かの気配を感じて踏みとどまった。

今までなんの予兆も感じ取れなかった。完璧に自分を消すことができる存在はそうそういない。見当は、すぐについた。

「こんばんは。あたしたちに何か用かしら？　こんな夜分に」

言葉の一つ一つに刺が含まれている。うっすらと笑みを口元に浮かべ、宿の壁にもたれかかりながら睨みを利かせてくるその姿は、迫りくる実態を伴った冷気のようなだった。夜の住人とはまた違うプレッシャーをまとっていた。

紫の髪が腰にまでさがり、月光と相成って端麗な輝きを発している。夜風に吹かれて流れるイリスの髪はまるでアヤメの花のようで、その横にはローブを着こんだ少年が立ち、表情は見えないがふてぶてしいように思える。フードの奥からは冷たい視線を感じた。彼の冷淡さも隣にいる女性に負けず劣らず鋭かった。

「答えてもらわなくとも結構ですよ。大体の見当はついています」
口調こそ丁寧だが皮肉のこもった、挑発するような声音だった。

「……」

「あら、無言？　まあいいけどね」

男は答えない。ただ黙って見つめ返すのみだ。
しばらく沈黙が息を返すが、一陣の風が吹き抜けてロートが口を

開いた。

「何か用事があったてきたのではないのですか？ 僕も早く寝たいので、案件を済ませてもらえると助かるのですけど」

欠伸するふりをするが、演技だとすぐにわかった。

「……これを」

男が懷から封筒を取りだす。

「誰から？」とイリスは尋ねた。

男は無言で歩み寄りイリスに手紙を手渡す。その間も、彼の動作は全く音を立てなかった。

空から降り注ぐかすかな光に目を凝らすと、純白の下地に複雑な模様が銀色で描かれているのがわかる。開き口の先端はリボンで止められていて、高級感がにじみ出ていた。

「サラさん——ですか？」

ロートが訊くが、男は背を向けて歩み去ろうとする。

完全に闇と一体化していて、気を抜けば見分けがつかなくなりそうだった。黒服に包まれた背中中は夜に溶け込んで、かろうじて顔が認識できるくらいだった。

「あ、待ちなさいよ」

イリスがホルスターから銃を抜き取り無防備な男の背中に向ける。殺気を感じて男が足を止めるが、振り向く様子はなかった。立ち止まったままの訪問者にイリスが話しかける。

「なんだ、それは。とでも考えているんでしょうね。いいわ、ひとつだけ教えてあげる。これはね、あなたの命を簡単に奪えるものよ」脅すように、突き放すように響く言葉の数々が果たして男に影響を与えているのか、微動だにしない男の姿からはまったく読み取ることができない。

崩しがたい緊張した空気の中、ロートが静かに男に向かって歩を進めた。小さいが、殺しそになったわずかな音が反響する。

「お話を聞かせてもらえますか？」

隙ができたのは一瞬だった。

話しかけたその瞬間、男は大きく跳躍し近隣の家の屋根へと飛び乗る。二人の視線が途切れ、あわてて追いかけようとしたが、男は何の手がかりも残していつてはくれなかった。

あきらめる他に手段はなさそうだった。

「逃がしたか……。ちゃんと見張ってなさいよ！」

「僕のせいですか？ 師匠がすっかり威嚇しておけばよかったんですよ！」

イリスの見苦しい八つ当たりに、ロートが反論する。

「あんたの方が近かったんだから、もっとしっかりするべきでしょ！ 何か文句ある？」

「ありますよ！ 師匠は飛び道具を持ってるんですから、動いたらすぐに止めるべき立場じゃないですか！」

「なによ！ 無闇に撃つわけにはいかないんだから！」

「それでも威嚇くらいはできるでしょう！」

「いいえ——」

「——できます——」

「——」

二人の喧騒が夜の街に響く。

人の声とはこれほど大きかったものかと家々を飛び移りながら思う。もう地上へ下りても安全だったが、この時ばかりは空に身を任せていたかった。

まさか、待ち伏せを食らうとは……。

考えてみれば、なにも落ち度があったわけではない。むしろ、任務をこなした上で逃亡まで成功したのだから上出来の部類にはいるだろう。しかし、それでも己に非があったのではないかと思案してしまうのは、プロとしての意識からだった。

それと同じくしてもう一つの懸念事項が頭をよぎる。

彼らは襲撃を予期していた。

つまり、全てを見透かされているということ。

「また、巡り合うだろう……」

それも、かなり近い内に。

ひょっとしたら剣を交えることになるかもしれない。あのイリスという女が持っていた武器、正体はつかめないが、非常に危険なものだと感じた。それに、あの弟子の存在も見過ごせない。見たところ、まだまだ甘いところはあったがかなりの腕前は持ち合わせているようだった。油断すれば、容赦なく返り討ちに合うだろう。

「サラ様に知らせなくては、な」

事態は意外と急展開になりそうだ。

ちらり、と。彼の主が居る場所へ目を向ける。

警護のための焰が盛大に焚かれている。たいまつが小刻みに動くと、それは巡回兵だということが一目でわかった。窓から見える明かりは、未だに消えていない。

ほかの場所ではとうに消灯されている。単なる夜更かしならばいいのだが、姫君となるとそうもいかない。いろいろ為すべきことがあるのだ。

また仕事を増やしてしまうことに後ろめたさを覚える。

なるべくなら裏で潰して楽にさせてさしあげたい。

しかし、今回ばかりはそういうわけにもいかないのだ。何と言っても、あの「グラナートの誓い」が関わることなのだから……。

「……ふう……ものすごく疲れましたね……なんだか無駄なことを延々と続けていた気がします」

ぜいぜいと荒い息を吐きながら果てしない脱力感に襲われる。結局、数十分に及ぶ口論は体力切れで終わった。住民たちの迷惑そうな顔を見無視しながら、いつまでも続くかと思われた師弟喧嘩は幕を閉じた。

「……物凄い虚脱感と睡眠欲を感じるわ。なんでかしら……」

争いなんて、冷静になってみれば馬鹿馬鹿しいものが多い。今回の騒動も例外なく意味のない労力だった。

多大な時間と力の代償に得たものは、急に重たくなった瞼を閉じようとする睡魔のささやきだけ。

「……寝ましようか」

「――そうね」

雨降って地固まったのかどうかは分らないが、すんなりと同意してふらつく足を懸命に運びながら部屋へと戻り、ベッドと床に倒れこんだ。

気がつけば、何故か太陽が高く昇り切っていた。

愛情

きらきら光る宝物

それを狙うはカラスが二匹

守るものと 守りたかったもの

朝を大きく通りこしてとつくに昼間になっていた。寝ぼけ眼で、先程まで月が君臨していたはずの場所に、直視できないような光を送り続ける太陽があるのを確認する。

日差しが肌にあたって、暖かい。あまりの眩しさに目を閉じると、真っ暗なはずの瞼の裏に太陽の輪郭が浮かんた。少しだけくらくらする。

昨夜ドレスを丁寧に返却してから夜道を一人歩きながら考えていた。

——サラは自分たちの正体に気付いているのではないか。目的も、行動も見抜かれてしまっているのではないかと。

それならば、いろいろと納得がいく。

ジャックから聞いた、男でも参加できるということ。イリスとロートが偶然にもサラに見染められたこと。元はといえば、ロートから声をかけたのであるが、それも意図的だったなら。あえて目立つように絶妙な位置取りをし、うまく話を運んだのだとしたら。

そして、誰かが見張っていたのだとしたら。

わざわざロートに女装をさせたのは遊び心だろうが、それにしても都合がよすぎる。どう考えても、素性が知れているとは思えないのだ。

となると。

可能性は限られてくる。

サラはグラナートの誓いが奪われるのを恐れている、というのが最も信憑性のある仮説だった。

この街には旅人を見張る組織か何かが居て、それによって警戒されているのではないか。

そんなことをずっと考えていた。

そしてそれは、イリスも同じことだったようだ。

宿に着いてみると、師匠の姿が見当たらない。またか、とも思ったが放っておくことにして考えることに専念した。その後帰ってきたので話を聞いてみると、なんとグラナートの誓いの居所を突き止めたらしい。

イリスもサラのことを疑っていて、昔話を頼りに大体の見当をつけて探しに出たところ、何人かの兵士が警備をしていたのだ。

奥行きのありそうな洞窟の入口で松明を持ちながら目を光らせていた。必ず何かある、という確信が生まれた。それだけ見つけるとすぐに帰ってきた。

何か手を打ってくる予想したのだ。もし自分なら、何かメッセージを送るはずである。

案の定ルートと待ち伏せをしていたところ、のこのこと姿を現した。捕まえて真相を吐かせたいところだったが、逃してしまったのでそうもいかない。それに、口論にも疲れた。

「……そういえば」

昨夜貰って、まだ開けてない手紙のことを思い出す。

疲れすぎていてすっかり忘れていた。どこに置いたかな、と部屋の中に目を走らせると几帳面にも机の上に乗せてあった。

手に持ってみると、しっとりした重さが伝わってきた。紙特有の冷たさはなく、さわり心地がとてもいい。

「――さてよ……」

何かが心に引っかかる。喉元まで詰まった違和感が気持ち悪く、必死に頭を回転させた。

——高級、リボン、手紙……。

王族が使うものとしては、これ以上に相應しい道具はないだろう。それなのに、どこかが変だった。

「そうか！」

本来ならば、わざわざ自分の素性を明かすような品は使わない。それなのに、サラは堂々と身分を誇示するかのような手紙を送り付けてきたのだ。

それはすなわち、相手側も思惑を悟られていると判断してのことだろう。

違和感は爽快感へと変わり、ロートはなんだか嬉しくなった。イリスを起こして発見を報告したい衝動にかられる。

寝起きの機嫌が悪いのは、知り過ぎているほどに理解していたので、目を覚ますような話ができたと理由の一つにあった。

早速叩き起そうと、手紙を置きそうになってから気付いた。

「まだ中身を見てないな……ま、文句はいわれなくていいでしょう」

確証のない自信は、気分の高揚からきているのだろう。絹で作られている蝶々結びにされたリボンをほどこき、先に付いていたボタンの周囲をぐるぐると回していく。段々とリボンの長くなっていく感触があった。

プレゼントを開ける子供のような気分で、便箋の三角をした部分を持ちあげる。

中には小ぶりの手紙——というよりもメモ用紙に近いような大きさの紙が1枚だけ入っており、半分に折られた裏から、いくつかの文字が透けて見えた。

好奇心がふつつつと沸き上がってきた。

「恐らく……脅迫か何かでしょうが——」

そんな予想を立てて、折られた手紙を開く。

こんにちは、であっているかしら？

本当は昨日言えればよかったのですが、そこまで頭が回らなくて。

あまり時間がないので、早速本題に入らせていただきますね。ズバリ、グラナートの誓いのことです。

あれは私の、いえ私たちの宝です。存在こそ公開していませんが、確かにあるのです。

ですから、お引き取りいただきたいのですよ。私も無駄な戦いはしたくない。旅人であるあなた達には不憫かもしれませんが、あきらめないというのなら実行使もやむをえません。

そのあたりをよく考えて、お願いします。じゃねっ！

……最後だけ妙に明るく締まっている。だが、内容はそうでもなさそうだ。

脅し、というよりは要請に近いように感じる。しかし、ロートたちの素性は明記されているし、目的も完璧にばれている。こうなったら、もう隠すようなことは何もない。

宝を狙う、と聞いたら誰でも嫌悪するものだ。自分の所有物ならなおさら。そこにあるのに、何故か探そうとも思わない者たちが、文句ばかり言うのだ。

崇め、ロマンに浸るのが楽しいと、そういうことなのだろうか。それで何かを得られるわけでもないのに、とロートは思う。

やはり、手に入れて初めて始まるものであるし、そうでなければ意味がない。そんな心情を、イリスとの旅で手に入れた。

「でも——私達の宝、か……」

なにか、そう言い切れるだけの根拠があるのだろうか。気になる1文ではあった。

自分で考えていてもきりがないので、師匠を起こそうと振り向いたとき。

「うわああっ！」

「ちょっと、耳元で叫ばないでよ！」

いつの間に目を覚ましたのか、しげしげと文面を眺めるイリスの顔があった。片耳を押さえて、いきなりの大声に驚いたのか目を丸くしている。

あまりの衝撃につい尻餅をついてしまった。硬い床にぶつけてしまい、腰が痛む。

痛みを和らげようと、腰をさすりながら立ち上がって。

「なんで起きてるんですかー、びっくりしましたよ……」

「あら、起きてちゃ悪い？」

機嫌を悪くしたのか、ムスツとした感じで拗ねてみせる。可愛らしく唇を突き出した格好は、1枚の画になりそうなほど様になっていた。

心臓に悪いんですよ、という呟きを内心に閉じ込めてロートは「すみません」と軽く謝った。

それでなんとか、斜めだったご機嫌を元に戻すことに成功する。今は喧嘩している場合ではないし、昨夜の反省もあった。

二人でベッドの縁に腰掛け、サラからの手紙を読み解くことにした。

「要は、挑発しているのね」

「……かなり歪曲した解釈だと思いますけど、確かに攻めに出るべきでしょうね」

「おっ、なかなか分かってきたじゃない！」

バシバシと背中を何回か叩く。すこぶる痛かったが、なんとか堪えた。

「――今度からはもう少し優しくしてください」

「え？ なに？」

「いえ……いいです」

小声だったために聞き取れなかったのか、それとも無視しただけなのかはわからないが、ロートは嘆息した。

イリスはよしっ、と気合を入れると寝転がった。

「行動と言葉が矛盾してるんですけど……」

「細かいこと気にし過ぎると禿げるわよ」

思わず髪を探ってしまった。大丈夫、まだ大丈夫だ。

思いなおしてみれば、この年で髪が薄くなっていたらかなりの重症である。だが、手をどけた際にピンクの毛が何本かはらはらと床に落ちて、かなり不安になった。

1つ空咳をして、間を取り直す。

「いつ行くつもりですか？」

「――なにが？」

ロートは眼光を鋭くして、イリスの紫色をした瞳を見つめ返した。瞬間、ふっと肩の力を抜く。

「ひよっとしたら僕を置いていくつもりじゃないかと」

「――なんであたしがそんなことするのよ」

ぎくしゃくした口調で返す。理由は明白だった。

ロートは優しい微笑みをイリスに向けて、自分も寝転がった。二人分の重みに耐えられず、ベッドが悲鳴を上げる。

「壊さないでよね」

負け惜しみのように、イリスが呟くが。その言葉は天井に吸い込まれていった。

「師匠の体重が重過ぎ――げほっ！」

渾身のストレートが腹に食い込み、激しくむせこむ。その内、体を破壊されそうで怖かった。はやいところ保険に入っていた方がいいかもしれない。

攻撃とは裏腹にイリスが穏やかな表情をしているのは、ロートが全てを見抜いていたからではなくて、純粋な気持ちからであった。

「あんたは残りなさい」

きっぱりと、それでも有無をいわせぬ圧迫感でイリスが言った。

「いやです」

これまたきっぱりと。ロートが言い返す。

「あんたは賢いんだからわかるでしょ、今回の奴らはその辺の山賊

とは違う。下手すると、命の保証はできないよ」

僅かに怒気をこめて、口調を強める。だが、ロートは気にする素振りも見せずに、明るい声を出した。まるで、不安を払拭しようとするかのように。

「僕は負けませんよ。なんて言っただって鬼に鍛えられているんですから」

「――鬼って？」

「もちろん師匠――ぐほっ！　がほっ！」

容赦のない蹴りが2発、鳩尾に食い込んで転げ落ちた。また床に腰を打って、痛みがぶり返して。

でも、苦しいわけではない。

イリスは本気で心配しているのだ。それは痛切に伝わってくる、それでもロートは除け者に、足手まといと思われるのが嫌でたまらなかった。

無力とは、何と悲しい言葉であろうか。まるで存在しているだけでも罪であるかのような、どこか虚しい響きをまとった弱者の証。

「僕は行きますからね」

強い意志を秘めた青い瞳が、貫くようにイリスを捕える。

返事はなかったが、既に否定の感情は霧となって消えていた。その代りに、愛弟子の成長に対する驚きと喜びが心の大部分を占めていたとも気づかずに。

決戦

キラキラ光る宝石も 光がなければただの石ころ。
数多の者を魅了する宝石も 愛でる人がいなければただのモノ
それでも大切な宝石は 今なお想いを伝え続ける。

あれほど晴れていた空には、一面を覆うどす黒く厚い雲が渦巻いている。まだ昼下がりではあったが、下界に陽光が届くことはなく夜かと思わせるほどであった。

滝のように落ち続ける豪雨が窓や壁を容赦なくたたき、誰ひとりとしていない街に音をもたらししていた。道に溢れでた水は河となつて低い方へと流れおち、大きな水たまりを形成している。

そんな微かな光の中、街の郊外を傘もささずに歩く人影があった。ずぶ濡れになりながらも、それでもひたひたと。止まることはなく一心にある地点を目指しながら、その眼は遠くを見据えている。

風が強くなって、打ち付ける雨の勢いがより一層激しくなった。もはや痛みなどではなく、なにか恍惚としてくる。

近來感じたことのない気分の高ぶりを胸の奥に秘めながらも、それでいて思考は冷静だった。

冷たい弾丸がそれを助けているのかもしれない。

突然、雨足が弱まって空を見上げる。一筋だけ開いていた雲の切れ間に入ったようだ。

なんだか話したい気分になって、今まで閉じていた口を開く。

「もうすぐ——ですよね？」

訊かなくても雰囲気分かっていた。段々と深まっていく緊張感
は、肌に突き刺さる。

「——そうね。近いわよ」

昨夜訪れた時に場所は特定してある。

あえて急ぐことはなく、落ち着かせるためにもゆっくり進むことに決めていた。経験の浅いルートにとって、ありがたいことではあった。

それ以上に会話が続くことはなく、再び強まった雨音だけが耳を支配する。

足を踏み出すたびに泥水が飛び跳ねて裾を汚したが、全く気にならなかった。

「……大歓迎、ということかしら」

数名ほど隠れるように警護していた兵士たちの姿はどこにもなく、代わりに大手を広げた洞窟の入り口が構えていた。中にはたいまつが二本、使って下さいと言わんばかりの様相で置いてあった。その隣には赤々と照らすかがり火が立っていて、火を取れるようになっている。

待ち受ける、という形容がふさわしいのだろう。それでも、誘っていることには変わりなかった。

「そのようですね」

受けて立とう、という闘志をみなぎらせてルートが一足先に入り込む。途端、轟音を立てて落とし穴にはまった――わけではなく、何事もなく火を灯らせることができた。

実に危なっかしくて、胸がざわめく。もし、たいまつに細工がしてあり、灯した瞬間に爆発するようになっていたら。それでなくとも危険はそこら中に転がっている。

ある意味では猛進さも必要なだけけれど、それが若さの証でもあるわけなのだが、心臓に悪い。おたがいに寿命を縮めあう師弟というのも、妙なものだ。

「まったく……」

と小言を垂れながらも、サラの顔が脳裏にちらつく。

罨の一つもない。それがやけに気になった。

イリスが足を踏み入れる前にもう片方のたいまつにも火を移し、差し出す。落ち着かない胸中の所為か、ぶっきらぼうに奪い取って、

先を歩いた。

その後が続いて、ルートが進む。

外は雨の音で騒々しかったが、洞窟の中で聞こえるのは自らの靴音だけ。鍾乳洞でできた空間によく響く。一つの音があちらこちらで反響し、幾重にもなって届くのだ。

大人数で行進しているような錯覚にとらわれる。

実際のところは二人しかないのだが、その音が勇ましくもあり、不気味でもあった。

滑らかな岩肌は足をとられやすく、緊張する。ただでさえすり易い環境であるのに、濡れ過ぎた足元のせいでかなり危なかった。たいまつで明かりで照らされた岩壁から、ぽたぽたと雫の垂れる音が聞こえる。

道は下っていく一方だったので、森にたまった地下水が流れてきているのだろう。ところどころ見受けられる池と呼ぶには小さな水たまりは、底が見えるほど透明度が高かった。

きつと、透き通るような味なのだろう。

しばらく行くと、道が二股に分かれていた。だが、迷うことはなさそうだ。

右手の方から光が見える。

何者かが先にいて、待ち伏せているのだ。不意討ちにはならないにしろ、要注意である。

「どちらに進みますか？ 罠の可能性もありますけど……」

二つの入り口を見比べながら、ルートがイリスに問う。

たしかに罠の可能性もなくなかったが、

「当然、右よ」

あまりにもあっさりとした答えだった。

「……なんでそう言い切れるのですか？」

要因がわからなかった。どこにそんな確信があるというのか。

「今まで何もなかった。ただそれだけよ。敵さんはあたしたちのこ

とを待っている――」

視線は光の彼方に向いているはずなのに……焦点はその先を見据えている気がしてならない。イリスの瞳に、いったい何が映っているのだろうか。

「サラが――待ってる……」

どうしてだろう、彼女のもとへたどり着けない気がして仕方無い。

予想通り――というか。

「やはり……来たか」

「そんなこと、最初からわかっていたのでしょうか。おそらく、僕らがグラナートへ来てからずっと」

監視者として、常に動向を見張っていた。

それこそ、希望をみなぎらせて城門を潜り抜けた時から。聞き込みを行うのも、ぶらぶらするのも、全てが。

「何故それほどまでに、守ろうとするのですか。旅人の性を捻じ曲げてでも、あなたにとって大切なものなのですか」

「私ではない。サラ様にとって、それが理由だ」

そう、主に全てを預けている。

いや、捧げていると言った方が正確かもしれない。

「サラさんに……どうして！」

人のために自分を押し殺せるものだ、とは信じられない。

どんなに強く願おうと、どんなに努力しようと、自我を消すことはできない。所詮、自分のためにしか生きられない生き物なのだ、人間とは。

「ひよっとしたら、私のエゴなのかもしれない。いや、エゴだと言いつてもいい。そこまでして、守るべき御方なのだ」

幼いころから聡明で、それどころか賢すぎて。美しい容姿とは裏腹に、王族に付きまとう暗い部分ばかりに目が行ってしまう。

父や母にはうまく隠しているが、疲れきっているのは痛いほどに感じられた。

どうにか力になりたい。

遠く及ばざるとも、出来る限りの献身を。

「……わかりました」

普段はめったに口を開かない男が、ここまで饒舌になったことからも、その決意はひしひしと伝わってきた。

理解こそしないが、ロートは想いを受け入れる。

「最後に一つ、いいですか？」

気づけばイリスの姿はどこにもなかった。

気配を消して、後ろを任せたのである。残された二人は相對し、睨み合うだけ。

「サラ・ハーレットとはいったい何者なのですか？　僕はただ――

それが知りたい」

わからなかった。彼女が何であるのか。

夜を覆う闇よりも漆黒で天を飾る星のような輝きを秘めた瞳と、明るくはじけるような笑顔。そのどちらが本物で、どちらが嘘であるのか。――それとも、全ては虚であったのか。

最期の質問を投げかけて、ロートは目の前にたたずむ男をまじまじと見やる。

安堵と使命が混ざった表情。

何度も自問自答し、やっと見つけた答えを紡ぎ出した。

「サラ様は――私の姫だ」

小さく、それでも芯の通った声でロートに告げると剣を抜きさる。刀身は短く、小回りが利きそうだ。陰で動く者にふさわしい形だった。

呼応するように、ロートもインフィニト・ノイテをゆっくりと構える。柄からすらりと伸びた暗黒が、鍾乳洞の光の少ない風景と相成って、見えづらかった。

臨戦態勢に入ったその中心に明かりがある。

光は長い影を作り出し、壁にまで伸びていた。じりじりと焼けていく音以外に、包み込むのは緊迫した空気だけ。先に動いたら負け

だと言わんばかりの時間が、過ぎていく。

実際にはほんの数秒だっただろう。それでも、途方もなく遠大に思えた。

——どこからか一陣の風が吹きこんで。

倒れたかがり火を合図に、まさに戦いの火ぶたが切っておろされた。

一方。

ルートに後を任せ一人先に進むのも、さほど時は必要なかった。くねくねと入り曲がっているものの分かれ道は一つもなく、結局はほとんど一本道のようなものだったのだ。これを迷えという方が難しい。

距離にしても来た道の半分ほどで、苦労はない。

天井から延びる柱の、どこか宝石の輝きにも似た鍾乳洞の様相を眺める余裕さえあった。

「綺麗なもののね——」

と思わずつぶやいてしまったほどである。

今まで手に入れてきた数々の宝に勝るとも劣らないが、しかし決定的に違うものがあった。

それは、何の感慨もないこと。

美しいだけで、ただそれだけなのだ。

想い、が詰まっていらないのだと思う。それでこそ宝石はまばゆいまでに輝くのであるし、手中にしたいと考えるのだ。

「所詮は風景か……はかないもののね」

「お手紙をありがとう——とでも言いましょうかね」

最深部よりも少し手前の地点に、サラの姿はあった。前の男と同じように来訪を予期していたようで、イリスの姿を見てもさほど驚いた様子はなかった。

雨が降り始める以前に洞窟へ到着していたのだろう。純白のワン

ピースに濡れた様子はない。

「いえいえ、どういたしまして。大した内容ではありませんでしたけれど……」

少々申し訳なさそうに目を伏せる。

長いまつげが強調されながら、完璧に整った顔に調和している。神々しいまでの美麗さだった。

「なかなか興味深かったわよ。特に、『私達の宝』という部分。……あれはいつたい、どういう意味なのかしら？　あなた個人のものだというならともかく、複数形になってる。それが、どうにも気になって」

イリスがそう問うとサラは目をそらし、さも楽しげに笑った。

「たしかに私の宝ではない。それは認める。けれど、ひょっとしたら最初から私達の目に触れてはいけなかったものなのかもしれないの」

足元に転がっていた小石をつま先ではじいて、脇にたまっていた水に落とす。澄んだ音が反響し、波状の模様が広がっていった。

おそらく、自分自身でも理解できていないのだろう。それが何を意味しているのか、何が込められているのか。

「……どうということ？」

イリスが訊き返す。

「たぶん、確証はないけど……見ればわかる気がします。百聞は一見にしかず、ということ」

イリスの後ろ側にある壁へ顔を向けながらも、どこか遠くを見つめるような表情だ。

その先にあるものは、グラナートの誓い。

「いい言葉よね。現物を目の前にした方が早い——物事を的確に言い表しているわ」

強引にでも視線を合わそうとするかのように、イリスが力を込めながら言った。

大きな声に引き戻され、サラの焦点がふっと戻る。

「私もそう思います。古人の知恵とはなかなか深いものですね。それこそ、想像もつかないほどに」

そう。

意外なほど現在と変わらないのだ。想いも、感情も、愛も。

「ええ、本当に……」

それを、あれほどまでに感じるとは思いもしなかった。過去からつながる螺旋と意義を垣間見るなどとは。

「こちらです」

そう言って、サラはイリスに背を向けて歩き出した。

足を踏み出すたびに肩まである艶やかな黒髪が揺れ、洞窟の中の清らかな水のように光を反射してきらめく。

その後ろ姿を注視しながら、イリスもその後が続く。

おそらく、と直感が告げている。この先にグラナートの誓いが、ひいては真実があるのだろうと。

サラの言葉から推測するには、なにか複雑な事情があるようだった。

「ねえ」

とサラに呼びかける。

姫様は足を止めずに、返事をした。

「なんででしょうか？」

「あなたはいつ見つけたの、グラナートの誓いを」

軽く尋ねるような口調で、ふと気まぐれに思いついたと言わんばかりの印象を与える質問だった。

それに対して、サラも朗らかに答える。

「そうですね……たしか小さいころに探検してたら見つけたんだっ
たと思います」

「探検って——あなたそんなことさせてもらえたの？」

サラはお転婆で有名なのだが、それでも一応は高貴な身分である。そうやすやすと城、または街の外に出かけられるとは思えない。

「んー、私は勝手に抜け出しましたからねえ。簡単でしたよ、その代わり帰ってくるとみっちり叱られましたけど」

それはそうだろう、と安易に想像ができた。

曲がり角をひとつ右に行つて、さらに進む。もはやたいまつの明かりしか見えないほどだった。

「子供の時にこんな奥まで行つたの？」

「はいー」

実に楽しそうな声を上げる。

きつと、子供のころを思い出して興奮が沸き上がってきたのだろう。気のせいか足取りも軽くなっていた。

「どこまで続いているのだろうと思って、とにかく無我夢中に進んでいったんです。そしたら、まさかのお宝を見つけてしまつて。ああ、もしかしたらこれが有名なサーデイクさんなのかな、と思ひましたね」

——サーデイクさん？

妙に引っ掛かつて、口にしてしまった。

「あ、まだわからないんでしたよね。そうだった、そうだった」

くすくす、と口元を押さえて笑う。

その表情は、なにか大きな秘密を友達に隠している時の、そのものだった。

「——？」

イリスは怪訝そうな顔を見せるが、サラは気づかないのかまだ笑い続けている。

気分が浮かれてきたのもあり、歩調が速くなつていく。

「すぐにわかりますよー」

言葉通り、サラは最後の角を曲がるとすぐに立ち止まった。

目の前には壁だけがある。

「……行き止まり？」

「ここからお楽しみです。ちょっと待っていて下さいね」

イリスに持っていた火を預け、何もない壁の右端に力を込める。

そういえば、突起も何もなく、表面は平らになっている。明らかに人の手が加えられたものだった。

つい最近に開閉されたのだろう、人工的に作られた扉は滑らかに次への道を通った。奥からは冷気が流れ込み、水の流れる音も聞こえる。

ヒト一人がようやくくぐれるような高さの扉を通り、冷たい空気を肌で感じる。

「ここは地下水が流れていて、とっても涼しいんです」

サラが説明する。

「私も最初に来た時、驚きました。なんでこんなにひんやりしているんだろうって」

洞窟特有の、寒いというよりは冷やされる感覚が体を覆う。

体の芯から冷却されるようだ――軽く地面に触れてみると案の定、濡れていた。

「でも。これのおかげで見つかられたんです」

「どういうこと？」

イリスが訊く。

サラはイリスから再びたいまつを受け取って、高く掲げた。隠れていたろうそくが姿を現して、そこに点火する。ほんのりとした炎は、揺れる影を作り出した。

「さっき、隠し扉があったでしょう。あの隙間から冷気を感じて、いろいろ調べたら扉があることに気付いたんです。で、押してみたら意外にも開いてしまった……ということなんです」

なるほど、と納得する。

たしかに何かヒントがなければ、発見できるような環境ではなかった。

「まあ、運がよかったのでしょうね」

あるいは、必然だったのか。

サラはふと表情を引き締めると、ゆっくりとたいまつを動かしていった。

部屋の隅々が照らされ、水を纏った壁がきらめく。快晴の日の海を眺めるような気分になった。

「見て下さい」

サラが指さす先に、一体の白骨がもたれかかっているのが見えた。おそらくここで力尽き、果てたのだろう。

「これは……？」

「見ての通り、昔ここで死んだ人です」

そんなことを聞いているのではない、と言いたいのは承知しているようだった。

「隣に、剣がありますよね。かなりの値打ちものです」

イリスの目にかからずとも、一目で高価だと判断できる代物だ。

刃は錆びついて朽ちてしまっているが、柄に刻まれた紋様はしっかりと読み取れた。

サラが埃を拭ったのであろう。汚れは一つもなかった。

そして――。

「グラナートの誓い……」

彼が守るように剣を突き立てたその横には、隣の台座には燦然と輝く大きな宝石が安置されている。

繊細に研磨されており、カットも申し分ない。完璧な、美しいタカラであった

夕陽のような輝きを奥に秘め、朝日のように光を放つ。

「もしかして、あの遺骨はサーディクのものなの？」

先程のサラの発言を思い出して、合点がいった。

となると、ただの昔話ではなく真実であったのだろう。なんともロマンチックな話である。

少しずらした視線の先には、かつて騎士であった男の骨がある。

サラは、ようやく真相に達したか、と言った面持で「ええ」と答えた。

「それ以外に考えられませんか――そういえば、物語の全体像は知っていますか？　あまり知られてないんですよ、サーディクが脱獄し

たところまでしか。その後、どうやってグラナートの誓いがここに運ばれてきたのか知りたくありませんか？」勿論、知るはずはないという口ぶりだった。

「それは当然、聞きたい——けど、なんで知られていないの？一番重要なところじゃない」

「おそらく……ですが。意図的に隠されていたのだと思います。この話を伝えたのは、サーデイクの親友デザルトだと言われていますから、彼が伏せていたのでしょうね。荒らされたくない、という気持ちで伝わってきます」

だが、どこからか真実の一部だけが流れ出てしまった。それゆえ、宝石の伝説だけが残っているのである。

「そう……じゃあ、お聞かせ願おうかしら？」

イリスが不敵に微笑む。

サラは頭のどこかで物語の構想を確認しているようだった。それを終えてから、ゆっくりと口を開く。

「その前に、これを見て下さい」

サーデイクの頭上を示す。イリスは顔を近づけると、その文字を読んだ。

愛と忠誠に生きし男　ここに眠る

行方

斬 空気を揺るがして
斬 剣と剣が交わる

闇の中での戦いだった。光もなく、聴覚と感触だけが相手を捕える。

声を出すのは自殺行為のようなものだ。その瞬間、餌食になる。インフィニト・ノイテを駆使しつつ、ロートは必死に打開策を探していた。場は暗闇の上、相手は地の利を知り尽くしている。完全に不利な状況であった。

また何も見えない空間から剣が振りかざされる。間一髪でそれを察知し、魔力の刃を広げて防御するも追撃はできそうになかった。再び静寂が支配を強め、耳を覆った。

全精力を傾けて男の行動に注意を払うが、足音一つ聞こえてはこなかった。

——ぞわり。

悪寒を感じて、咄嗟に身を伏せる。今まで胴体があった場所を凶器が薙いでいき、一陣の風が流れた。男はまた距離を取り直し、ロートの息をうかがう。

かすかにでも明かりがあれば反応できただろうが、今は完全な闇のみが存在する。相手は素人。正直、負ける気がしなかった。

僅かな呼吸が、振動となって男に伝わる。それを頼りに、斬りかかっていった——その刹那、剣先に硬いものを感じる。思わず足を止めると、そこにはたしかに壁があった。

ロートが使うのは魔力によって形を変える剣。そのことには気づいていたが、ここまで応用性が高いとは思っていなかった。

魔力の防壁に誰かが触れたのを感じ、その一点から一筋の線を突

き出す。手ごたえはない、くしくも外したようだ。

動けば動くだけ不利になる。それならば、待ち伏せをかけるのみだ。

すでに男はロートとイリスの待ち伏せに遭った経験がある。それが、強みとなればいいのだが……。

今度はまた別の方向から、衝撃を感じた。その方向へ槍のように鋭く漆黒の刃が伸びていく――瞬間。集中力の落ちていた背後から一撃をくらう。

「なっ！」

思わず声が出てしまった。

新たな盾をつくる暇もなく剣劇が振り下ろされる。

ひよう、ひよう。幸いなことに勘だけで避けてはいるが、息つく間もなく攻撃が続けられる。

石を投げてみたのが、成功したようだな。

怒涛の連続攻撃を浴びせかけながら、そう思う。カウンターに必要なのは、触れた瞬間に反応する集中力だ。それをそらせれば、おのずと勝機がみえてくる。

これで片をつける、と言わんばかりに手を休めることはない。五撃目でようやく軽い手ごたえを感じた。ローブの裾が切れたようだ。だが、その代わりに見えない刃が足元の地面をえぐったのがわかる。もう体勢を立て直したというのか。

不意打ちでなければ分が悪い。後方にステップしながら、もう一つ落ちていた石ころを拾った。

なんとか凌ぎきったものの、次もまたかわしきれんという保証はどこにもない。同じ策になるが、再び魔防壁を張り巡らせた。

頭上にモノがぶつかったのがわかるが、それを無視して来るべき次の本命に備える。今度は目の前から衝撃を感じた――が。感触があまりにも軽すぎて、警戒を強める。

「後ろか！」

この闇の中、確実に背後をつける技術は相当のものだろう。

振り向きざまに剣を大きく伸ばす。そのまま横に払って――男を捕える感触があった。

「よし！」

巻きつくように、滑らかに縛り付ける。けれど、足と腹に痛みを感じて思わず離してしまった。

――石か！ 気づきながらも、どうしようもない。

間合いが取られて、緊張が走った。

その時。

「あー、ロート君じゃないか！」

間延びした声が響いて、明かりがともされる。

大層びっくりして、横を見ると期待を裏切らずもう一人の旅人が目を丸くして立っていた。

「……他の奴か」

実を言うと、ジャックのこともマークしていたのだが、どうにもおかしい行動ばかりを取っているので大丈夫だろうと判断したのだ。まさか、真剣勝負のさなかに乱入してくるとは思わなかったが。

「そこにいる人も、よく見かけるよね。俺の後についてきたりしてさ」

「なっ!？」

男は驚愕した。追跡していたことに気付いていた……？

この青年はいったい何者であるのか。今まで、勘づかれたことなんて一度もなかったというのに。

「つと、ハッターリを掛けてみたり」

「は、ハッターリ!？」

柄にもなく大声を出してしまう。肩透かしを喰らうだなんて、誰が想像したのだろうか。

「ハッターリ？ だったり？」

「もう、どっちなにしてください！」

ロートが叫ぶ。ジャックはカラカラと笑うだけで他に何も言わなかった。

本当に分かっていたのか、それとも違ったのか。本人以外に知る者はいない。ただ、男は気がかりでならなかったが。

「いいよ、いいよ。もうどっちでも」

ジャックがひらひらと手を横に振る。その際に薄汚れた茶色のコートが揺れて、水が滴り落ちた。雨の中、一人で道を進んできたのだ。傘もさすことなく、魅かれるように。

「……いや、白黒はつきりしてほしいのだが——心が休まらん」

男の独り言は誰にも聞かれることなく、消えていった。

なんだか百八十度、変わった展開になってしまった。先程までの緊迫した空気が嘘のようだ。明かりが加わったことも、原因の一つにあるのかもしれない。

「あ、ところでイリスさんはどこにいるんだい？ 君だけのわけでもなさそうだけれど」

「師匠なら、この先にいると思いますよ。でも……」

言葉を切って、男を睨みつける。

戦いは終わっていない、そう言いたいのだ。

その視線を敏感に読み取って、ジャックが間に割って入る。両手でコートと男を押しやり、「まあまあ」と仲裁したので、威嚇しあう二人は手を出せなかった。

「こんなところで争っていないで、早く先に進もうよ。イリスさんの落とした財布も見つかるかもしれないし、何より冒険者としての血が騒ぐしね」

冒険者——ジャック。

イリスやコートと同じく、宝とロマンを求めて旅する者だ。同業者、と言っているだろう。

そのため、各地で出会うこともある。

「……言いにくいことなんですけど、財布は師匠が持っていたみたいです。すみません、無駄な時間を取らせてしまって」

真相を告げなかったのは、せめてもの優しさだ。

まるで気にしてないような素振りを見せて、ジャックはうなずい

た。

「そう、それならいいんだ。一件落着だね」

実を言うと始まってすらいなかったのだが、そのことは伏せておく。

「さて、次に行こうか？」

「次？」

「この奥に、なにかがあるんだろう？　それが、ピリピリと伝わってくる。そうだろ、ロート君」

答えは分かっているよ、と言いたげな瞳がロートを捕える。

ロートは男の様子をちらりとうかがうと、首を縦に振った。

「ええ、行きましょう。師匠のもとへ！」

真実

最も重たく

時に非情で 時に暖かく

そして明かされるもの

決して豪華とはいえない室内に、二人の男が相對して座っている。あちらこちらに染みのある木製のぼろ屋ではあるが、人が暮らせる程度にはなっている。現に、サーディクも逃亡してから余生をここで過ごしてきた。もう何年になるだろうか。

髪は疲れと苦勞によつてすっかり白く染まり、頬も痩せこけている。がたいのよかった体つきもすっかり細くなってしまったが、それでも農作業によつて鍛えられた筋肉は衰えていなかった。

部屋にあるのは磨き上げられた剣と、必要最低限の家具のみだ。絨毯も敷かれていなければ、ベッドすらない。目的のためには不要なものだったのだ。その目的も、ついに果たされようとしている。

「久しぶりだね、デザルト」

変わることのない柔和な瞳に、老成した雰囲気加わって穏やかな空気を醸し出している。

呼びかけられた男は手に高級なワインを持って、静かに座っている。

彼は宣言通りに必死で働き、そして指折りの資財を持つまでに至った。一方のサーディクも贅沢することなく、ひたすら質素に生活してきた。ただあるモノを求めるためだけに。

「そうだな。ちょうど十年か……」

二人は定期的に連絡を取り合っていた。

そうはいつでも、デザルトがいろいろと忙しく最近は会うことが少なかったのだが。

「すまなかったね。無理を言ってしまった。だが、そのおかげで助かった」

サーディクの手握られているのは、夕日のような色をした宝石——グラナートの誓いだ。

このころはまだ名前などなく、ただ単に大きな宝石として認知されていた。

デザルトはひらひらと手を横に振って、声を出して笑った。

「いやいや、大したことはねえって」

それは本当ではなかった。

十年間という歳月は、グラナートの誓いを手に入れるためにかかったのだ。かなりの労力を要し、それなりに揉め事もあった。

それでも手に入れることができたのはデザルトの執念と手腕によるところが大きい。

「君にはいつも助けてもらってばかりだな。あの時といい、今だってそうだ。一生、感謝しても足りないくらいだよ」

「それはもう、耳にたこができるほど聞きあきたぜ」

二人が再開するたびに、サーディクはお礼を言い続けてきた。

「それでも、これで最後だ。私はもう、それほど長くはないからな」

「……そうみたいだな」

長年の過酷な環境が祟って、病氣にかかってしまったのだ。他人が見ても、余命は短いと思えるほどに。

「さあ、乾杯というか」

デザルトの持ってきたワイングラスに赤色の液体を注ぎ、口に含む。

実に懐かしい味だった。

「乾杯——！」

デザルトが陽気に合わせて、グラスが触れ合う涼やかな音が響いた。

そして、一息に飲み干す。

「もしかして、これはかなり高級なものではないか？」

「もちろんそうだが？」

当たり前のように答える。年代物で、そうそう簡単には手に入らないものだ。

「私などにはもったいないだろう。もう幾ばくもないというのに」

「なんのために金持ちになったと思っているんだ？　ここぞという時に贅沢するためだぞ。今奮発しなくていつ奮発する」

「——そうか。君がいいなら、それでいいのだが……」
ちらり、と宝石に目を遣る。

「気にするなよ。問題はないんだから」

空になったグラスにさらに追加を入れ、なみなみと注ぐ。サーデイクはそれをしげしげと眺めて、一気に飲み干した。デザルトもつられるように次から次へとグラスを空けていった。

ようやく丸々一本がなくなったとき、サーデイクがおもむろに立ち上がった。

「そろそろ——いこうか」

普通ならば酔っ払っているところだが、そうはならなかった。いや、なれなかったという方が近いのかもしれない。

「いいのか？」

「ああ、準備はできているさ」

今にも崩れそうな小屋を後にし、足を進める。

洞窟まで一筋の道が自然に形成されていて、サーデイクが通い続けていたことをありありと示していた。

その周りには雑草が深々と生い茂り、他に誰も行き来していないのがわかる。

「にしても、ほんとに田舎だなあ。人っ子一人いないじゃないか」

「新王様の元、都会の方がかなり発展したからな。その分、辺境の村々はさらに人口が減ってしまった。まあ、私には好都合ではあるのだがな」

言い終えるなり、サーディクがいきなり吐血した。倒れそうになる体をデザルトがあわてて支える。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

「……大丈夫、ではないのだろうか。だからこそ、行かなければならない」

血に濡れないように剣と宝石を抱えながら、サーディクが前を見据える。

その姿は哀愁に満ちていて、デザルトは思わず目頭を押さえた。肩を貸しながら、さらに先を進む。

「ここは――やはり美しいな」

日中は陽が差し込み、洞窟内部は明るくなっている。通い慣れた道程をゆっくりと進みながら、サーディクが呟いた。

日光を反射して眩いばかりに輝く雫が、ぽたりと流れおちていく。

「ああ、全くだ」

実のところ周りの景色を見回している余裕などはなかった。サーディクの命が燃え尽きる前に、送り届けなければならない。足元も不安定で、かなり神経を使った。

それきり黙ってしまったサーディクを心配しながら、ようやく深部にたどり着く。

衰弱した騎士の作った人工扉を開いて、中に踏み入れると冷たい空気が体を覆った。静かにサーディクを壁にもたれかけさせて、話しかける。

「おい、生きてるか？」

「……まだ……な」

息絶え絶えに反応する。本当にもう、命の灯火は消えかかっているのだ。

「見えるか、お前の作った台座だ」

サーディクは返事の代わりに、激しくむせこんだ。その中にか、かなりの量の血が混ざっている。

デザルトは語調を強めて、騎士の横に剣を突き刺した。

「これで、忠誠を」

そして今度はサーディクから受け取った宝石を台座に安置する。

「これで、愛を」

何か言いたいことはあるか、とサーディクに向き直る。

彼は力なく首を振ると、ふっと微笑んだ。もう苦悩も何もない、充実した表情だった。まるで、全てを悟りきったかのような。

「……ありがとう」

小さく、聞き逃しそうになるような声だったがしっかりとデザルトの耳に届いた。

「それは言うなって」

「――そう……だったな」

デザルトはしゃがみ込むと、サーディクの頼りなげな視線と目を合わせた。

「さよなら――なのかな」

「お前も変わってないな。二度目をいう気はないぞ」

「そう……だっ……た」

また会おう、その言葉は竟に出されることなく胸に秘められて。デザルトが涙ながらに墓標を刻むのを見届けるだけだった。

エピローグ 終焉

サラが語り終わると、複数の足音が近づいてくるのがわかった。

「師匠、大丈夫ですか？」

男が扉を開き、その影からロートが顔を出す。イリスの顔を見てからだったので、大して感情はこもっていなかった。

「見りゃわかるでしょ。何にもなってないわよ」

「いや、ここは訊かなきゃ失礼かなと思っただけです」

「……ところで、後ろの人は何？」

複数形でなかったのは、なにかの感情の表れなのだろうか。

「なんだか、戦うのもばからしくなって——ジャックさんのおかげですよ」

そう言って、後ろに控えるもう一人の旅人を見遣る。

イリスはあえて視線を合わせないようにした。

「財布、あったんだって？」

「……気づいてたくせに」

「あはは、もう。人聞きが悪いなあ」

え？

「知ってたんですか？」

「なかったら、宿になんて泊まれないだろ。あれを口実にして、いろいろ調べようと思っただけさ」

「あ……」

手を打って、納得する。この人は、どれほど奥が深いのだろう。とぼけているようで、しっかりしている。むしろ常人より賢いかもしれない。

「で、ここに来ることができた。先は越されてしまったけどね」

「やめときなさい。これは、盗むべきものじゃないわ」

はて、とジャックが首をひねる。

「どうしてだい？」

「ちよっと来るのが遅すぎる。また手間がかかるじゃない」

「そんなこと言われても……」

ジャックが口ごもる。その横では、男がサラに話しかけていた。

「伝えてしまったのですか？ 真相を」

「仕方無いでしょう。止めるのにはあれしか方法がなさそうだったし。元はと言えば、あんたがちゃんと足止めしてればよかったんだからね」

「申し訳ございません」

男が深々と頭を下げる。サラはそれを嘆息しながら見つめると、言った。

「まあ、一件落着したことだし。問題ないけど」

内心、あまり話したくはなかった。グラナートの誓いの存在が広まるのは好ましくなかったし、サーディクの亡骸はそつとしておきたかったのだ。

だからこそ、私達の宝だ、と書いたのである。

「彼がいたからこそ、私達はこの地で安住していられるのだから」
かつて戦争を仕掛けた隣国は衰退し、荒れ地になっている。サーディクがエーデルや克蘭デを守ったからこそ、豊かで緑の生い茂る街が生まれたのだ。

「イリスさんも、心にとどめてくれそうだしね」

今この場に居合わせた他の二人には話すことになりそうだが、心配はしていない。

サラは明るい声を出して、皆に呼びかけた。

「さあ、そろそろ戻りましょう！」

外に出ると、あれほどまで厚く空を覆っていた黒雲は跡形もなく消え去り、そのかわりに七色のリボンが掛けられていた。風は湿気を帯びているものの、涼しげで心地よかった。

出るまでの道のりはあえてスローペースで進み、ロートとジャッ

クに事の次第を説明した。二人とも感心した様子で話に聞き入っていたが、他言はしないと背中では語っていた。

「さ、ロート。次行くわよ！」

イリスがロートの背中を叩いて宣言する。

つんのめりながらもなんとか堪えて、ロートは驚いた表情を見せた。

「もう行くんですか!？」

いざという時に備えていつでも旅立てる準備はしてあるが、いくらなんでも急すぎる。

「風のようにあらわれ、雷のように去る。それが旅人よ。わかったら歩く！」

「そんなのはじめて聞きましたよ——」

ぶつぶつと文句を垂れながらも、ロートが道を歩き出す。その横にイリスが付き添って、だんだんとその姿を小さくしていった。

それを見送ってから、ジャックが別れを告げる。

「じゃあ、俺もそろそろ行くよ」

「はい、気をつけて下さいね」

何故だろう、こんなにもすっきりした気分になったのは。

イリス達とは反対の方向へ進んでいくジャックを眺めながら、そう思った。

「きつと、この青空のように晴れ渡っているのでしょうね。どうしてなのか、すごく気分がいいの」

「それは——」

男がサラの方へ向き直る。

長い艶やかな黒髪が風に揺れて、舞い踊った。

「心の秘密を打ち明けられたからなのでしょう」

春風が潤った青空を通り抜けて、虹の下を遊びながら駆けていった——。

完

エピソード 終焉（後書き）

ようやく完結いたしました。

実を言うと投稿始めた時にはすでに書き終えていて、しかも続編まで作り終わっているという……。ちょこちょこ推敲しながら進めていたんですけど、かなり遅くなってしまいました。

感想や批評を残していただけると、嬉しいです。ちなみに、ランキングというものにも登録したので、気に入っていただけたらポチっとお願いします。

続編を読みたいという方は、プレシヤス × オーシャン で検索してみてください。おそらく、作者の他の作品というなかにあると思います。

それでは、いままで読んでいただきありがとうございました。彼らの冒険はまだまだ続くとおもいます！

おまけ（前書き）

せっかくなので、おまけを一つ。

おまけ

おまけ

「サラ様、ご執務もよろしいのですが、少し休まれたらいかがでしょうか。このままでは倒れてしまわれます。最近は両陛下が体調を崩していましたが、いまはすっかり元気になられております。ですから――」

「あー……うん、言われなくてもわかってるよ、そのくらい」

「だったらなぜ手を休まれないのですか。ずっとペンが動きっぱなしですよ」

「べ、別に気にしないでよ。あんたには関係ないじゃん」

「そんなことございませぬ。サラ様が過労で倒れたりなさったら……私はどうしたらいいか」

「だーかーらー、あんたは放っておいてくれれば――あれ、そう言えばあんたの名前ってなんだっけ？　ずっと『あんた』って呼んでる気がする」

「私に名前など必要ありませんので、あんたで結構でございます」

「作中でも男としか書かれてないし……ねえ、教えてよ」

「それこそ必要のないことでございます。気になさらないでください」

「気になる気になる気になる！」

「そんなことより――」

「わかった。取引しよう。名前を覚えてくれたらあたしも休む。それでいいでしょ？」

「……………」

「何で黙り込むのさー。いいでしょそのくらい」

「――リリアン」

「え？」

「私の名前です……」

「リリアン？」

「……………はい」

「あっはははっははははは！！！！！！」

「……………」

「り、リリアン！　だめだ笑いが止まらない！　あはははは！」

「——それでは」

「ぎゃはははは！　わかってるよ、リリリアンッ！」

「そちらの書類は私がお預かりいたします。サラ様はどうぞお休みください」

「あ、ちちょっと！」

「……これは？」

「えーと。手紙」

「どなた宛てですか」

「リリアンには関係ないでしょ」

「そういうわけにはいきません。お目付役としての責務がござい
ます」

「プライバシーの侵害」

「私の秘密を握っておいてですか？」

「ぐ……」

「このまま国王陛下の御前で読み上げてもよろしいのですが」

「わかった、わかったよ」

「——それで？」

「街の男の子」

「いつお知り合いになられたのですか？」

「この間の舞踏会の勧誘の時に」

「ははあ——さては女性以外にも声をかけるのが目的で」

「そ、そんなことないもん」

「サラ様に変な虫がつくとよろしくありません。これからは禁止するよう申し上げてまいります」

「まってよ！ いいじゃない、そのくらい」

「駄目です。陛下が何とお嘆きになるか……」

「もし言ったらあんたの名前をばらすからね」

「私を脅す気でございますか」

「そうよ」

「……………」

「……………」

『妥協しましょう』

みんなそれぞれ秘密があります。

おまけ（後書き）

おまけをつけました。

プレシヤス × オーシャンもどうぞよろしく（私の力ではリンクをはりつけられませんでした……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9276h/>

プレシャス × プレシャス

2010年10月8日14時51分発行